

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2014 年 2 月

「キリストの性質―受肉の期間―(Ⅲ)」 「神の律法への従順によってキリストを映す」

「第一天使のメッセージ『神のさばきの時がきた』」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「キリストの性質—受肉の期間—(Ⅲ)」 4

朝のマナ

「神の律法への従順によってキリストを映す」 9
キリストを映して

現代の真理

「第一天使のメッセージ- 神のさばきの時がきた」 66
三重のメッセージ

力を得るための食事

「おかずのかぼちゃパイ」 76

お話コーナー

「ささいなものに変わる」 78

教会

【正丸教会】

〒 368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465
FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒 780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒 905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：<http://www.4angels.jp>
メール：support@4angels.jp

発行日 2014 年 1 月 31 日
編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション
〒 368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: HighRes on front cover; Getty Images
on page 9

Printed in Japan

安息日の意義とその回復

最後の時代に安息日の改革の働きが完成されることが、イザヤの預言の中に予告されている。「主はこう言われる、『あなたがたは公平を守って正義を行え。わが救の来るのは近く、わが助けのあらわれるのが近いからだ。安息日を守って、これを汚さず、その手をおさえて、悪しき事をせず、このように行う人、これを堅く守る人の子はさいわいである。』」「また主に連なり、主に仕え、主の名を愛し、そのしもべとなり、すべて安息日を守って、これを汚さず、わが契約を堅く守る異邦人は一わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈の家のうちで楽しませる」（イザヤ書 56:1, 2, 6, 7）。

この聖句が、キリスト教時代にあてはまることは、その前後関係から見て明らかである。「イスラエルの追いやられた者を集められる主なる神はこう言われる、『わたしはさらに人を集めて、すでに集められた者に加えよう』と」（同 8 節）。ここに、福音によって異邦人が集められることが予告されている。そして、そのとき安息日を導ぶ者たちに、祝福が宣言されている。こうして、第四条を守る義務は、キリストの十字架と復活と昇天を越えて、彼のしもべたちが福音の使命をすべての国民に宣べ伝える時にまで及ぶのである。

主は、同じ預言者によって、「あかしをたばねよ。律法をわが弟子たちのうちに印せよ」と命じておられる（イザヤ書 8:16 英語訳）。神の律法の印は、第四条の戒めの中に見いだされる。十誡の中で、第四条だけが、律法を与えたかたの名称号とを二つとも明らかにしている。それは、彼が、天と地の創造者であることを宣言し、したがって、他のすべてにまさって崇敬と礼拝を受くべきかたであることを示している。この戒めを除いては、だれの權威によって律法が与えられたかを示すものは、十誡の中に何もない。……イエスの弟子たちは、第四条の安息日を、創造主の記念と彼の權威のしるしとしての正当な位置に高めることによって、それを回復するように求められている。

「ただ律法と証とを求むべし。」種々の矛盾した教義や意見が盛んに唱えられているが、神の律法は、あらゆる意見、教義、説などを吟味する誤つことのない唯一の規準である。……

創造主の休息と祝福とによって聖別された安息日は、罪を犯さないアダムが聖なるエデンにおいて守ったものであり、また、墮落したが悔い改めたアダムが、楽園を追放された後も守ったものであった。……その時から現在に至るまで、神の律法に関する知識は地上で保たれ、第四条の安息日は守られてきた。……

この制度がわれわれの崇敬を要求するのは当然である。……それは、日の老いたる者によって制定され、その永遠の言葉によって命じられたものである。（各時代の斗争闘下巻 177～179）

贖罪

キリストの性質―受肉の期間― (Ⅲ)

V. あらゆる点において誘惑された

人類にふりかかるありとあらゆる不幸と誘惑を経験されたのはキリストだけである。この女から生まれた者で、キリストほど激しく誘惑に攻められ、世の罪と苦悩という重荷を負われたおかたは他にない。彼のように広いやさしい同情をもったおかたは他にない。人間としてあらゆる経験をおもちになったキリストは、重荷を負い、試みられ、戦っているひとりびとりを思いやるばかりでなく、これと思いを同じにすることがおできになった。(教育 78)

神は人のかたちのうちにあられたキリストのうちにあって、人にかみつくあらゆる誘惑に耐えられた。わたしたちのために、このお方は悲嘆にくれた人性の苦悩と試練にあずかれた。(ウォッチマン 1907 年 12 月 10 日)

このお方は「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われた(試みられた)」。サタンはこのお方を一歩ごとに攻撃しようと待ち構え、自分の火のような誘惑を投げつけた。しかし、このお方は「罪を犯さず、その口には偽りがなかった」。「主(は) …試練を受けて苦しまれた」、このお方の聖潔の完全さに比較して苦しまれた。しかし、闇の君は彼のうちに何も、誘惑に反応する一つの実想あるいは感情も見出さなかった。(教会への証 5 巻 422)

わたしたちが次の言葉の意味を理解できればよいのだが、「キリストは試練を受けて、苦しまれた」。このお方はつみのしみのないお方であったが、その聖なるご性質の精錬された感覚が悪と接触させられるとき、このお方に言いようのない苦痛を与えた。しかし、人性をご自分にまとい、このお方は大背教者と顔を合わせて直面し、ご自分の御座の敵とひとりで立ち向かわれた。一つの思いにおいてさえ、キリストは誘惑の力に屈しなかった。サタンは人の心の中に自分が足がかりにできる何かの点を見出す。彼の誘惑が力を行使できる何かの罪深い願望が大事にされている。しかし、キリストはご自身について、「この世の君が来るからである。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない(わたしのうちに何もない)」

と宣言された。誘惑の嵐がこのお方の上に炸裂したが、それらはこのお方をその神への忠誠からそらさせることができなかった。(レビュー・アンド・ヘラルド 1887 年 11 月 8 日)

わたしは無限の神の御子の人性について考える主題に近づくときに危険があることを察している。このお方はご自分が人からみつくあらゆる誘惑の力を理解するために、人のありさまにまで、ご自身を低くされた。……ただの一度でさえ、その多方面にわたる誘惑に応じられたことはなかった。一度もキリストはサタンの陣営に踏み込まれたことはなく、彼を有利にされたことは一度もなかった。サタンはこのお方のうちに自分の進軍を推進するようなものを何も見出さなかった。(ハイナル・コメント [E. G. 初作コメント] 5 巻 1129)

キリストが試みに負けることは不可能だったのだと主張する人が多い。もしそうなら、キリストはアダムの立場に置かれることはできなかったし、アダムが得られなかった勝利を得ることもおできにならなかったであろう。もしわれわれが何らかの意味でキリストよりもきびしい戦いをたたかわねばならないとしたら、キリストはわれわれを救うことがおできにならないであろう。だが救い主は、罪の負債ごとと人性をおとりになった。彼は試みに負ける可能性のまま人間の性質をおとりになった。キリストが耐えられなかったことで、われわれの耐えねばならないことは何一つない。……キリストは、人のために最もはげしい試みに耐えて勝利された。彼は、われわれのために、飢えや死よりも強い自制心を働かせられた。(各時代の希望上巻 124, 124)

VI. 着せられた罪と世の有罪宣告を負われた

キリストは世の罪の有罪宣告を負われた。わたしたちの充足はただ神の御子の受肉と死においてのみ見出される。このお方は神性によって支えられていたために苦しむことがおできになった。このお方には不忠や罪のしみがなかったために耐え忍ぶことがおできになった。(ユース・インストラクター 1898 年 8 月 4 日)

このお方〔キリスト〕は人性をお取りになり、人類の弱さと墮落を負われた。(レビュー・アンド・ヘラルド 1874 年 7 月 28 日)

アダムがエデンで罪を知らなかったときでさえ、神のみ子が人の性質をおとりになることは無限の屈辱に近かった。ところがイエスは、人類が四千年にわたる

罪によって弱くなっていた時に人性をおとりになったのである。アダムのすべての子らと同じように、イエスは遺伝という大法則の作用の結果をお受けになった。そのような結果がどのようなものであるかは、イエスのこの世の先祖たちの歴史に示されている。主は、われわれの苦悩と試みにあずかり、罪のない生活の模範をわれわれに示すために、このような遺伝をもっておいでになったのである。

サタンは天にいたとき、神の宮廷におけるキリストの地位のことでキリストを憎んでいた。彼は自分自身がその地位から退けられると、ますますキリストを憎んだ。彼は罪人である人類を救うことを誓われたおかたを憎んだ。それでも神は、サタンが主権を主張しているこの世へ、み子イエスが人間の弱さを受けつづ無力な赤ん坊としておいでになることをお許しになった。神はイエスが、すべての人と同じように人生の危険に会い、すべての人間と同じに失敗と永遠の損失をかけて戦いをたたかわれることをお許しになった。(各時代の希望上巻 35)

人と神の驚くべき結合よ！このお方はご自分の神性から生命力と朽ちることのない活力を人類に注ぎ出すことによって、病気の進入を阻止するためにご自分の人性を助けることもおできになった。しかし、このお方は人の性質にまでご自分を低くされた。……神が人となられた！(レビュー・アンド・ヘルト 1900 年 9 月 4 日)

キリストは、われわれの人性をもつて、アダムの失敗をあがなわれるのであった。しかし、アダムが誘惑者から攻撃されたときには、彼には罪の影響がすこしもなかった。彼は完全な人間としての力をもっていて、心もからだも活力に満ちていた。彼はエデンの栄光にとりかこまれ、天使たちと毎日まじわっていた。イエスがサタンと争うために荒野へはいつて行かれた時には、アダムの時のようではなかった。四千年間にわたって、人類は体力も知力も道徳価値も低下していた。しかもキリストは退歩した人類の弱さを身につけられた。こうすることによってのみキリストは人類を墮落の一番深い底から救うことがおできになるのであった。(各時代の希望上巻 124)

人性という衣に覆われ、神の御子のご自分が救おうと望まれる者たちの水準にまで下りてこられた。このお方のうちにはきずも罪深さもなかった。このお方はつねに純潔で汚されていなかった。それでいてなお、このお方はご自分にわたしたちの罪深い性質をお取りになった。墮落した人類と交わることができるためにご自分の神性を人性で覆い、このお方はアダムが不従順によって自分と世のために失ってしまったものを、人間のために再び得ようとなさった。このお方はご自身

のご品性の中に、神のご品性を世に表された。(レビュー・アンド・ヘラルド 1896 年 12 月 15 日)

このお方はわたしたちのためにご自分の王衣をわきへおき、天の御座から降りて、ご自分の神性に人性をまとうためにへりくだられた。そして、ご自分の生涯とご品性がすべての人の模倣すべき型となり、彼らが永遠の命という尊い賜物を得られるように、罪のうちにはおられなかったが、わたしたちの一人のようになられた。(ユース・インストラクター 1886 年 10 月 20 日)

このお方は罪のしみなくお生まれになったが、人類家族と同様にこの世界に入ってこられた。(手紙 97, 1898 年)

イエスは、何の害もけがれも受けないで、無思慮な人々や粗暴な人々や礼儀知らずな人々の中に……生活された。(各時代の希望上巻 91)

キリスト、すなわちほんのわずかな罪や汚れのしみも知らなかったお方が、墮落した状態にあるわたしたちの性質をお取りになった。これは有限な人間が理解できる以上に大きな屈辱であった。神が肉において現された。このお方はご自分を低くされた。なんという思索と深く熱心な瞑想の主題であろう!このお方は無限に偉大な天の全能者であられた。それでいながら、ご自分の神性と栄光の原子を一つも失わずに、非常に低く身をかがめられた!このお方は貧しさに、また人の中で最も深く墮落した者にまで身をかがめられた。(サインズ・オブ・タイムズ 1898 年 6 月 9 日)

不義の世の罪がキリストの上におかれたにもかかわらず、また屈辱をしのんでわれわれの墮落した性質をおとりになったにもかかわらず、天からの声は、イエスを永遠なる神のみ子と宣言した。(各時代の希望上巻 117)

このお方にはそのご品性の上につみのしみがなかったにもかかわらず、わたしたちの墮落した人間の性質をご自分の神性に結びつけるためにへりくだられた。このように人性をお取りになることによって、このお方は人性を尊ばれた。わたしたちの墮落した性質をお取りになることによってこのお方は、その性質がご自分が用意された豊かな備えを受け入れることによって、また神性にあずかることによって、どのようになれるかを示された。(レビュー・アンド・ヘラルドとバトル・クリークにおける働きに関わる特別な指示 1896 年 5 月 26 日 13)

彼〔パウロ〕は思いをまずキリストが天で、御父のふところで占めておられた地位に向けさせた。彼はこのお方がその後、ご自分の栄光を脱ぎ、自発的に人の性質のことにとく屈辱的な状態の下に自らをおかれたこと、僕の責任を受け、死に至るまで、しかももっとも不名誉で不快な死、最も屈辱的で、最も苦しい死―十字架の死―に至るまで従順になられたことを表している。(教会への証 4 巻 458)

天使たちはキリストの前にひれ伏した。彼らは自分たちの生命を捧げたいと申し出た。イエスは、天使の生命では負債を払うことができないから、自分が死んで多くの人を救うのだと仰せになった。キリストの生命だけが、人類の身代金として天父に認められるのである。イエスは、天使たちにも果たさねばならない役割があることをお語りになった。すなわち、彼らはイエスと一緒にいて、幾度かイエスを力づけるのである。イエスは人間の墮落した性情をとられるので、その力は天使たちに匹敵することさえできない。天使たちが、イエスの屈従や大きな苦難の目撃者とな……るのである。(初代文集 262)

不純のただ中で、キリストはご自分の純潔を維持された。サタンはそれにしみをつけることも墮落させることもできなかった。このお方のご品性は罪に対する完全な憎しみを表した。このお方に対して放蕩な世の激情をことごとくかきたてたのは、このお方の聖潔であった。なぜなら、ご自分の完全な生涯によって、このお方は世に恒久的な譴責を投げかけ、不法と、罪を知らないお方の純潔でしみのない義の対比を明らかにされたからである。(パイブル・コメント [E. G. ホワイトメント] 5 巻 1142)

キリストを映して

Reflecting CHRIST



2月 「神の律法への従順によってキリストを映す」

2月1日

神の意志と品性の啓示

「このようなわけで、律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである。」(ローマ 7:12)

多くの宗教教師たちは、キリストはご自分の死によって律法を廃された、それゆえに人はその要求から解放されている、と主張する。なかには、律法を重苦しいくびきであると言い、律法の束縛とは対照的に、福音の下において自由が享受できると主張する人々もいる。

しかし、預言者や使徒たちは、神の聖なる律法をそのようには見なさなかった。「わたしはあなたのさとしを求めたので、自由に歩むことができます」(詩篇 119:45)。キリストの死後に書いた使徒ヤコブは、十誡を「尊い律法」「完全な自由の律法」と言っている(ヤコブ 2:8,1:25)。そして、十字架から、半世紀の後に、ヨハネは、「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、神の律法を行なう者」はさいわいであると言明している(黙示録 22:14 英語訳)。

キリストがその死によって天父の律法を廃したという主張には、なんの根拠もない。もしも律法を変えたり、廃止したりすることができるのであれば、人間を罪の刑罰から救うためにキリストが死なれる必要はなかった。キリストの死は、律法を廃止するどころか、それが不変のものだということを証明しているのである。神のみ子は、「律法を大いなるものとし、かつ光栄あるものとする」ために来られた(イザヤ書 42:21 英語訳)。……また、ご自身について、「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と宣言しておられる(詩篇 40:8)。

神の律法は、その性質そのものから考えても、不変のものである。それは、その制定者の意志と品性の啓示である。神は愛である。そして、神の律法は

愛である。その二大原則は、神に対する愛と人間に対する愛である。「愛は律法を完成するものである」(ローマ 13:10)。神の品性は、義と真理である。神の律法の性質もそうである。詩篇記者は言っている。「あなたのおきてはまことです。」「あなたのすべての戒めは正しい」(詩篇 119:142, 172)。そして、使徒パウロは、「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」と宣言している(ローマ 7:12)。神の思いと意志の表現であるこのような律法は、その制定者と同様に永続的なものでなければならない。

人間を神の律法の原則に調和させることによって神と和解させるのは、改心と聖化の働きである。初めに、人間は神のかたちに創造された。人間は、神の性質と神の律法とに完全に調和していた。義の原則が、彼の心にかかれていた。しかし、罪が、彼を創造主から引き離した。彼は、もはや、神のかたちを反映しなくなった。……しかし、神は、人間が神と和解することができるように、「そのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。」人間は、キリストの功績によって、創造主との調和を回復することができるのである。(各時代の斗争闘下巻 193, 194)

2月2日

罪人が律法との調和へ連れ入れられる

「律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子を、罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである。」(ローマ 8:3, 4)

律法は、人間に罪を示すが、救いは与えない。律法は、服従する者には生命を約束するが、犯す者には死を宣告する。人間を罪の宣告や罪の汚れから解放することができるのは、キリストの福音だけである。人間は、神の律法を犯したのであるから、神に向かって悔い改めなければならない。そして、キリストに対しては信じてその贖いの犠牲を受け入れなければならない。こうして人間は、「今までに犯した罪のゆるし」を受け、神の性質にあずかる者となる。彼は、子たる身分の霊を授けられた神の子であるから、「アバ、父よ」と呼ぶのである。

さて、このような人は、自由に神の律法を犯してもよいであろうか。パウロは、次のように言っている。「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである」(ローマ 3:31)。「罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておれるだろうか」(同上 6:2)。そしてヨハネは宣言する。「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。そして、その戒めはむずかしいものではない」(ヨハネ第一 5:3)。人の心は、新しく生まれることにより、神の律法と一致するとともに、神と調和するようになる。この大きな変化が罪人の中に起きたとき、彼は、死から生命へ、罪から聖潔へ、違犯と反逆から従順と忠誠へと移ったのである。神から離反していた古い生活は終わった。和解の生活、信仰と愛の新しい生活が始まった。こうして、「律法の要求

が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされる」のである（ローマ 8:4）。そのとき、「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」という魂の言葉が発せられるのである（詩篇 119:97）。

「主のおきては完全であって、魂を生きかえら（改心さ）せ」る（詩篇 19:7）。人間は、律法がなければ、神の純潔と神聖さ、あるいは自分自身の罪と汚れについて、正しい考えを持つことができない。罪についての真の自覚もなく、悔い改めの必要も感じない。自分たちが神の律法の違反者であるという失われた状態を悟らず、キリストの贖罪の血の必要を自覚しないのである。心の根本的変化も生活の改変もなしに、救いの希望を受け入れる。このような表面的改心が広く行なわれていて、キリストと結合したことのない多くの者が教会に加えられているのである。……神の言葉と聖霊によって、神の律法の中に現われている義の大原則が、人間に示される。（各時代の大争闘下巻 195 ～ 197）

2月3日

神の律法は品性の標準

「あなたの義はとこしえに正しく、あなたのおきてはまことです。」(詩篇 119:142)

誤った聖化論が、……今日の宗教運動において顕著な位置を占めている。これらの理論は教義的に誤りであり、实际的結果においても危険である。そして、それらの説が一般に歓迎されているという事実を見るとき、この点においての聖書の教えをすべての者がはっきり理解することが、なおいっそう必要となる。

真の清め(聖化)は、聖書が教えている教義である。使徒パウロは、テサロニケ教会への手紙の中で次のように言っている。「神のみこころは、あなたがたが清くなることである。」そして、「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように」と祈っている(テサロニケ第一 4:3, 5:23)。聖書は、清めとは何であって、どのようにしてそれに到達できるかを、はっきりと教えている。救い主は、弟子たちのために祈って、「真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります」と言われた(ヨハネ 17:17, 19 参照)。使徒パウロは、信者たちに、「聖霊によってきよめられ」るようにと教えた(ローマ 15:16)。

聖霊の働きは、何であろうか。イエスは、弟子たちに次のように言われた。「けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」(ヨハネ 16:13)。詩篇記者も、「あなたのおきてはまことす」と言っている。……そして、神の律法は、「聖であって、正しく、かつ善なるものである」とあり、神の完全の写しであるから、その律法に従って形造られる品性も、清いものとなる。

キリストは、このような品性の完全な模範である。「わたし(は) わたしの父

のいましめを守った。」「わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしている」と主は言われる(ヨハネ 15:10, 8:29)。キリストの弟子たちは、彼のようにならなければならない。神の恵みによって、神の聖なる律法の原則に調和した品性を形成しなければならない。これが聖書のいう清めである。

この働きは、キリストを信じる信仰によってのみ達成されるもので、神の霊の内住の力によるのである。パウロは、信者たちに次のように勧告している。「恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」(ペリピ 2:12, 13)。キリスト者も罪の誘惑は感じるが、しかし常にそれと戦い続ける。ここにおいて、キリストの援助が必要になる。人間の弱さが神の力と結合する。そして信仰は、「感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜わったのである」と叫ぶのである(コリント第一 15:57)。

聖書は、清めの働きが、漸進的なものであることをはっきりと示している。罪人が悔い改めて、贖罪の血によって神と和解するとき、キリスト者の生活ははじまったばかりである。彼は、「完全を目ざして進」み、「キリストの満ちみちた徳の高さにまで」成長しなければならない。(各時代の犬争闘下巻 196～198)

2月4日

真の弟子は神の律法に従う

「すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法である。」(ヨハネ第一 3:4)

なんの努力も克己も、世俗の愚かさからの分離をも要求しない安易な宗教を望む心が、ただ信じさえすればよいという一般うけのする信仰の教義をつくり上げた。使徒ヤコブは、次のように言っている。「わたしの兄弟たちよ。ある人が自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか。その信仰は彼を救うことができるか。……ああ、愚かな人よ。行いを伴わない信仰のむなしいことを知りたいのか。わたしたちの父祖アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげた時、行いによって義とされたのではなかったか。あなたが知っているとおりに、彼においては、信仰が行いと共に働き、その行いによって信仰が全うされ……たのである。これでわかるように、人が義とされるのは、行いによるのであって、信仰だけによるのではない」(ヤコブ 2:14～24)。

神の言葉の証言は、この、行ないを伴わない信仰という人を惑わす教義に反対している。あわれみを受ける条件に従わずに神の恵みを受けることができると主張することは、信仰ではなくて、臆断(おくだん)である。なぜなら、真の信仰は、聖書の約束と規定とに基づくものだからである。……

罪と知りながらそれを犯すことは、聖霊のあかしの声を沈黙させ、魂を神から引き離すものである。「罪は不法である。」そして、「すべて罪を犯す者〔律法を犯す者〕は、彼を見たこともなく、知ったこともない者である」(ヨハネ第一 3:6)。ヨハネは彼の手紙の中で、愛についてくわしく述べたのであるが、しかし、神の律法を犯す生活をしながら清められたと主張している人々の正体を、摘発することを躊躇しなかった。『彼を知っている』と言いながら、そ

の戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである」(ヨハネ第一 2:4, 5)。

ここに、すべての人の信仰の告白を試みる試金石がある。天においても地においても、清めに関する神の唯一の標準によって量るのでなければ、だれひとり、清い人であるとはいえない。もし人々が、道德律を重んじず、神の教えを軽んじ無視し、これらの最も小さい戒めの一つを破り、またそうするように人に教えるならば、そのような人々は、神の目からは評価されない。そしてわれわれは、彼らの主張することにはなんの根拠もないことを知ることができるのである。

また、自分には罪がないと主張する者は、そう主張すること自体が、清めから程遠い証拠である。そのような主張は、彼が、神の無限の純潔と神聖さとを真に認識していないためである。あるいは、神の品性と調和するためにはどのようにならなければならないかを、悟らないためである。イエスの純潔と気高い美しさを知らず、罪の邪悪さと害悪を真に理解しないために、人は自分を聖なるものと考えるのである。(各時代の大争闘下巻 201, 202)

世からキリストを区別したのは、このお方の生涯において表わされた義であった。(上を仰いで 303)

2月5日

神の律法は変わらない

「今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう。』（ヨハネ 12:31, 32）

神の律法は、神ご自身と同様に神聖であるから、罪の贖罪をすることができるのは、神と等しいかただけであった。罪を犯した人間を律法ののろいから贖い、再び、天と調和させることができるものは、キリストのほかになかった。キリストは、罪のとがと恥とをその身に負われるのであった。罪は天父とみ子とを離れさせるほど、清い神にとっていまわしいものであった。キリストは、墮落した人類を救うために悲慘のどん底においてこられるのであった。（人類のあけぼの上巻 53, 54）

贖罪の計画は、人類の救済よりもっと広く深い目的を持っていた。キリストが地上に来られたのは、人間を救うためだけではなく、この小さな世界の住民が神の律法に対して当然払わなければならない尊敬を払うようになるためだけではなく、それは宇宙の前で神のご品性を擁護するためであった。救い主は十字架におつきになる直前に、その大犠牲が人間だけでなく他の諸世界に住む者たちに与える影響を予見してこう言われた。「今はこの世が裁かれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。そしてわたしがこの地から上げられる時にはすべての人をわたしのところに引き寄せるであろう。」

人間の救いのためにキリストが死なれた行為は人間が天に入る道を開いたばかりでなく、神とみ子がサタンの反逆に対して取られた処置の正当性を全宇宙の前に示すのであった。それは神の律法の永遠性を確立し、罪の性質とその結果を明らかにするのであった。

大争闘は最初から神の律法に関して戦われたのである。サタンは、神は不

正で、神の律法は不完全であるから、宇宙の幸福のためにそれを変更することが必要であることを証明しようとしてきた。彼は律法を攻撃してその創始者の権威をくつがえそうとしていた。この争闘において神の律法が不完全なもので変更が必要であるか、それとも完全で不変のものであるかが示されるのであった。……

天はキリストが受けられた侮辱とあざけりに注目した。そしてそれがサタンの扇動によるものであることを知った。……彼らは光と闇との戦いがますます激しくなるのを見た。キリストが十字架の上で苦悶のうちに「すべてが終わった」(ヨハネ 19:30) と叫んで息を引き取られたとき、勝利の叫びはすべての世界と天そのものに鳴り響いた。……サタンは彼の本性をあらわした。……キリストが人間の罪の刑罰を負われた事実そのものが、すべての造られた者に対して律法が不変であること、神は正しく、憐れみ深く、自己を否定するかたであること、そして神の政府の統治には無限の公平とあわれみが結合していることを大いに証明してあまりあるのである。(人類のあけぼの上巻 61 ～ 64)

2月6日

神の律法は愛の律法

「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事なものは、ほかにない。』（マルコ 12:30, 31）

愛、すなわち創造と贖いの基礎は、真の教育の基礎である。これは神が人生の案内書として与えてくださった律法の中で明白にされている。……無限のお方、全知のお方を、力を尽くし、思いを尽くし、心を尽くして愛することは、あらゆる力を最高に発達させることを意味する。それは全存在、すなわち魂と同じく体にも思いにも神のかたちが回復されることを意味する。

第二の戒めも第一の戒めと同じである。「あなた自身を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」。愛の律法は神と同胞への奉仕のために体、思い、魂の献身を求める。そしてこの奉仕はわたしたちを他の人々にとって祝福とする一方、最大の祝福を自分自身にもたらすのである。無我はすべての真の発達の根底となっている。……

天においてルシファーは権力と権威において第一番であることを望んだ。彼は神となり、天の統治権を持ちたかった。そしてこの目的のために彼は天使たちの多くを自分の側に引き入れた。彼が自分の反乱軍と共に神の宮廷から追い払われたとき、反乱と利己主義の働きは地上で続けられた。放縦と野心への誘惑によってサタンはわたしたちの最初の両親の墮落させることをなしとげた。そのときから現在に至るまで人間の野心を満足させることと利己的な希望や願望にふけることは人類の破滅であることが証明されてきた。

アダムは神の下で、天の家族の原則を維持するために地上の家族の頭として立つべきであった。これが平和と幸福をもたらすはずであった。しかしだれも「自分自身のために生き」ることをしない律法に対して、サタンは反対しよう

と決心した。彼は自己のために生きようと願い、自分を感化力の中心にしようとした。これが天で反乱を起こさせたものであり、地上に罪をもたらししたのはこの原則を人がうけいれたからであった。アダムが罪を犯したとき、人は天の定められた中心から断たれた。悪魔が世における中心的な力となった。神の御座があるべきところにサタンが自分の座を置いた。世は自発的な供え物として敵の足元に忠誠の宣誓をおいた。

神の律法の違反は次々に苦悩と死をもたらしした。不従順によって人の力はゆがめられ、利己心が愛の場所を占めた。人の性質は非常に弱くなったので悪の力に抵抗することが不可能になった。……人々は自分たちを奴隷とする支配者を選び、その車に縛りつけられた。……キリストはご自分が彼らのために命の木、すなわちその葉が国民を癒すための木を植えられたことを彼らに示すために世に来られた。(レビュー・アンド・ヘラルド 1913 年 6 月 16 日)

2月7日

個々の責任

「あなたのすべての戒めは正しい(義です)。(詩篇 119:172)」

神の御霊は戒めの道へわたしたちを導く。なぜなら、「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれる」というのが約束だからである。わたしたちはもろもろの霊を神のみ言葉という試金石によって試すべきである。なぜなら、世には多くの霊がいるからである。「律法と証とに求めよ。もし彼らの語ることが、この言葉にかなわなければ、それは彼らのうちに光がないからである」。……

神はわたしたち一人びとりに個々の責任を求め、原則からご自分に仕えて、自分自身でご自分を選ぶようにとわたしたちに要求しておられる。……

神はご自分の律法の違反を軽くみなされることはない。「罪の支払う報酬は死である」。不従順の結果は罪の性質が、神の統治の幸福とこのお方の被造物の益に対して反目していることを証明している。神はねたむ神であられ、父の罪を子に報いて、ご自分を憎む者の三、四代に及ぼされる。不法の結果はあくまでも悪を行う人々に従う。しかし、このお方はご自分を愛しご自分の戒めを守る人々には千代までもあわれみを示される。悔い改めて主の奉仕にとりかかる人々は主の恩寵を見出す。そしてこのお方は彼らのあらゆる不義を許し、彼らのあらゆる病を癒される。

地上の事柄において、もっとも注意深く自分の職務の要求を果たし、自分の主人の意志を実行しようとする僕は最も高い価値がある。以前ある紳士が信頼のおける運転手を雇いたいと思った。公募したところ、何人かが応募してきた。彼は、一人びとりに、しかるべき絶壁の縁に対して、車を乗りあげずにどれくらい近くまで運転できるかを尋ねた。次々と彼らは危険な距離にまで行けると答えた。しかし、ついに一人がそのような危険な仕事からはできる限り

遠ざかっていると答えた。彼が雇われ、その地位についた。

わたしたちの天父より、良い僕の真価のわかる人がいるであろうか。わたしたちの懸念は、どれくらい主の戒めから離れられるかを見て、立法者の憐れみにつけこみ、なお自分たちを神の忍耐の境界線のうちにいると自分の魂に言い聞かせるようなものであつてはならない。そうではなく、わたしたちの心遣いは、どれだけ不法から遠く離れていられるかであるべきである。わたしたちはキリストとわたしたちの天父の側にいることを決心し、目のまわるような向う見ずな憶断によって危険を冒してはならない。……

わたしたちは自分たちの言葉と行動によって天の規則を大いなるものとすべきである。律法を尊ぶ者は、裁きの時に、律法によって尊ばれる。(ビュー・ア
ンド・ヘルト 1911 年 6 月 22 日)

2月8日

キリストはご自分の律法を大いなるものと するために来られた

「主はおのれの義のために、その教を大いなるものとし、かつ光栄あるものとすることを喜ばれた。」(イザヤ 42:21)

大背教者の策略を通して、人は自らを神から引き離すように導かれ、罪を犯し、いと高きお方の律法を破ることにおいて、神と人との敵の誘惑に屈した。神は人間の墮落した状態に合わせるためにご自分の聖なる律法を一点一画でも変更することはおできにならなかった。なぜなら、そうすることによって、天地を治める律法を作られた神の知恵に不信を示すことになるからである。しかし、神は人間の身代わりと担保となり、不法者にふさわしい刑罰に苦しみ、悔い改めた魂にご自分の完全な義を与えるために、ご自分のひとり子をお与えになることがおできになった。

キリストは罪深い人類のために罪のない犠牲となられ、人類を希望の捕われ人となされたが、それは神の聖なる律法を破ったがゆえの神に対する悔い改めと、自分の身代わり、担保、義としてのキリストを信じる信仰を通して、彼らを神への忠誠とその聖なる律法への従順へ連れ戻すことができるためであった。……

罪深い人類のためのキリストの命と死は、罪人に律法の要求に見合う義を与えることによって、罪人を神の恩寵へ回復し、御父に受け入れられるようにするという目的のためであった。しかし、いつも神の律法を無効にすること、そして救いの計画の真の意味をゆがめることがサタンの目的である。であるから、彼はカルバリーの十字架におけるキリストの犠牲は、人間を神の戒めを守るという義務から解放する目的のためであったとの偽りを考案した。彼は神がご自分の憲法を無効とし、ご自分の道徳的な標準を投げ捨て、そしてご自分

の聖にして完全な律法を無効にされたという欺瞞を世に押し付けた。もうしそうなっていたとすれば、天にとってなんという恐るべき犠牲であろう！

律法の廃止を宣布する代わりに、カルバリーの十字架は雷のような声調で、その不朽かつ永遠の性質を宣布している。律法を廃しながら、天と地と数え切れないほどの諸世界の統治を維持できるのであれば、キリストは死なれる必要は無かったのである。キリストの死はエホバの律法の有効性についての疑問を永久に解決した。罪深い世のために刑罰をあますことなく受け、イエスは悔い改めた魂にいと高きお方の律法を守るための恵みを与えることによって彼を神との恩寵に回復するために、神と人の間の仲保者となられた。

キリストは律法と預言者を滅ぼすためではなく、それらをまさに文字通り成就するために来られた。カルバリーの贖罪は墮落した世界だけでなく、墮落していない天と諸世界の前で、神の律法を聖にして、正しく、真実なものとして証明した。(サインズ・オブ・タイムズ 1895 年 6 月 20 日)

2月9日

いかにして律法を大いなるものとするか

「それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるであろう。」(マタイ 5:19)

いったいどのような理由で人は、神は自分たちがこのお方に絶対的に従うか、あるいは自分自身の道を取るかについて厳密ではないと考えるのであろう。アダムとエバはこのお方のご命令の一つを犯したためにエデンを失ったのである。それでいながら、どうしてわたしたちはあえていと高きお方の律法を軽んじ、自分たちの魂に対して欺瞞的な弁明を仕立てることができようか。わたしたちがこうするとき非常な危険を犯すことになる。わたしたちはすべての律法を、一点一画に至るまで守らなければならない。なぜなら、一つの点において罪を犯す者は、すべての律法に対して有罪だからである。すべての光線は受け入れられ、大事にされなければならない。さもなければわたしたちは闇の体となる。主イエスは、「これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるであろう」と宣言しておられる。わたしたちは自分たちの言葉と行動によって、天の規則を大いなるものとすべきである。……

洪水が世界を一掃する前に、神はノアを通して人々に来るべき大洪水について警告するためにメッセージを送られた。警告を信じない者もいたが、彼らが信じないからといって、雨がとどめられることも、地の深みの水があざける世を沈めるのを妨げることもなかった。そして、今日、神の僕たちをこのお方の律法のすべての戒めに調和させるために、最後のメッセージが前触れを告

げている間、あざける者と不信者がいるであろう。しかし、すべての魂は自分自身の誠実さのうちに立たなければならない。ノアが洪水前の世界を警告するのに忠実であったように、わたしたちも神から自分たちに与えられてきた大いなる信頼に忠実でなければならない。至るところに、……あざける者がいたとしても、わたしたちはこの時代の人々に天の真理を提示することにしり込みしてはならない。……

あなたがたを肉の安心感のうちに寝かしつけることを喜ぶ人々がいる。しかし、わたしには違う働きがある。わたしのメッセージはあなたがたが自分の生活を改革し、宇宙の神に対する反逆をやめるように命じるために、あなたがたに警告することである。……

イエスを信じる信仰は律法を無効にするのではなく、それを確立するのであり、またわたしたちの生活の中に従順という実を結ぶのである。……

キリストがご自分の栄光のみ座の前に提示される教会は、「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいない」。あなたは、自分たちの品性の衣を小羊の血で洗った人々の中にいたいであろうか。そうであれば、「悪を行うことをやめ、善を行うことをなさい」なさい。あなたの神の戒めと定めのうちを責められることのないように歩みなさい。あなたがたは天の真理を守ることが自分の都合に合うかどうかを問うべきではない。あなたがたはいかなる代価を払おうとも、自分の十字架を負い、イエスに従うべきである。あなたはこのお方のくびきが負いやすく、このお方の荷が軽いことを見出すようになる。(ビュー・アズ・ヘラルド 1911 年 6 月 22 日)

2月10日

鏡のように、律法は罪を明らかにする

「しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである。それによって、わたしたちが彼にあることを知るのである。」(ヨハネ第一 2:5)

神はご自分が品性を量る義の標準を持っておられる。この標準がこのお方の聖なる律法であり、わたしたちに人生の規則として与えられている。わたしたちはこの要求に応じるように要求されている。そして、こうするとき、わたしたちは神とイエス・キリストに誉れを帰すのである。なぜなら、神が律法をお与えになり、キリストがそれを大いなるものとするために死なれ、それを誉れあるものとされたからである。このお方は次のように宣言しておられる。「もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおると同じである」。……「世と世の欲とは過ぎ去る。しかし、神の御旨を行う者は、永遠にながらえる」。

キリストの言葉を聞く者は多いが、行う者は少ない。このお方の言葉は神学的には受け入れられても、もしそれらが魂に印され、生活に織り込まれないなら、品性を聖化させる効果はない。真理を受け入れることと、それを日常生活の中で実践することは別である。聞くだけの者からは、神のみ言葉は感謝の応答を呼び覚まさない。「主なるあなたの神をあなたの心を尽くして、あなたの魂を尽くして、あなたの力を尽くして愛せよ」といういましめは、正しいものだとは認識されているが、その要求は認められていない。その原則が実行されていない。

わたしたちはみな罪深く、自分自身ではキリストの言葉を行うことができない。しかし、神は有罪を宣告されている罪人がしみや汚点のない者となること

ができるように備えをしてくださった。「もし、罪を犯す者があれば、父のみも
とには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおら
れる」。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、彼は真実で正しいか
たであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」。
しかし、キリストは罪人を救われる一方で、罪人を有罪に定める律法を廃され
ることはない。……鏡がわたしたちに自分の顔がきれいではないことを示すよ
うに、律法はわたしたちに罪を示す。鏡には顔をきれいにする力はない。それ
は鏡の仕事ではない。

律法も同様である。それはわたしたちの欠点を指摘し、わたしたちに有罪
の判決を下す。しかし、わたしたちを救う力はない。わたしたちは許しを求め
てキリストの許へ行かなければならない。このお方はわたしたちの有罪をご自
身の魂に引き受けられ、わたしたちを神のみ前に義認してくださる。そしてわた
したちを罪から自由にして下さるばかりでなく、神のみ旨に対する従順をお捧
げできる力を与えてくださるのである。……

今日、多くの人々が、神のみ旨を行うことをなおざりにしながら、天を得よ
うと思って自分自身の標準を打ち立てている。しかし、そのような人々はみな、
砂の上に建てているのである。彼らはただ聞くだけの者である。……わたした
ちの救いには神の御子の命という代価を要した。そして神はわたしたちが裁き
のテストに耐える土台の上に自分たちの品性を築くことを要求しておられる。(サ
ィンズ・オブ・タイムズ 1896 年 9 月 24 日)

2月11日

神の律法 対 自己の律法

「すなわち、ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされたと同じように、ひとりの従順によって、多くの人が義人とされるのである。律法がはいり込んできたのは、罪過の増し加わるためである。しかし、罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた。」（ローマ 5:19, 20）

アダムは自分の思いを神に対する反逆に定めたわけでもなく、あるいは何らかのかたちで神に敵して語ったのでもなかった。彼は単にこのお方の表現されたご命令に対して正反対に進んだのであった。そして今日どれほど多くの人々がまったく同じことをしていることであろう。そして、彼らの罪はそれよりはるかに大きい。なぜなら、彼らには神の律法を犯す重大な結果を警告する不従順とその恐るべき結果についてアダムの経験という実例があるからである。そのため、彼らにはこの問題に対する明白な光があり、神の権威を否定し、従わないことに対する彼らの罪に言い訳の余地はない。アダムは自分の不従順の結果を測るために立ち止まることはなかった。

わたしたちはこの地上で耐えることができる。……そしてわたしたちには後で起こったことを考察する特権があるのだから、神のいましめに従わないことが何を意味するのかを悟ることができる。アダムは誘惑に屈した。そしてわたしたちには罪の問題とその結果がはつきりと自分たちの前におかれているため、原因から結果まで読むことができ、行動の大きさが罪を構成しているのではないことがわかる。そうではなく、それは神の表現されたみ旨への不従順であり、このお方の統治の律法を拒むことにより、事実上、神を否定することである。人間の幸福は神の律法への従順のうちにある。神の律法への従順により、彼は垣根に囲まれ、悪から守られる。

だれも神の具体的なご要求から離れ、自分が安全に従うことができると決

めた自分自身の標準を打ち立てながら幸福になることはできない。そうであれば、さまざまな思いにあった多岐に渡る標準があることであろう。そして統治は主の御手から取り上げられ、人間が政権を握るであろう。自己の律法が打ち立てられ、人の意志が最高のものとされる。そして高く聖なる神のみ旨が従い、敬い、尊ばれるために提示されるとき、人間の意志は自分自身の道を行き、自分自身の衝動を行いたいのである。そこで人間の代理人と神の代理人の間に戦いがある。

わたしたちの最初の両親の墮落により、神のご意志に対する人間の意志の絶対的な従順という黄金の鎖が切れてしまった。従順はもはや必ず必要なものだとみなされていない。人間はいにしへの日の住民たちについて主が絶えず悪いことばかりであったと言われた自分自身の思いに従っている。主イエスばわたしの父のいましめを守った」と宣言しておられる。どのようにであろうか。人としてである。見よ、わたしはあなたのみ旨を行うために参ります、ああ神よ。ユダヤ人の告発者たちに、イエスはご自分の純潔と徳と聖なるご品性のうちに固く立ち、彼らに次のように仰せになることができた。「あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると責めうるのか」。(原稿 1, 1892 年)

2月12日

悪との妥協はない

「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる。」(イザヤ 55:7)

昔のイスラエルの時代に、主の宮で律法の書が見つけられたとき、それはヨシヤ王の前で読まれた。そして彼は自分の衣を裂き、聖職にある人々に自分のために、また彼の民のために主に尋ねるようにと命じた。なぜなら、彼らは主のおきてから離れていたからである。彼はイスラエルの人々をみな共に召し、書の言葉が会衆の聞いているところで読まれた。為政者や民の罪が指し示され、王は彼らの前に立って、自分の不法を告白した。彼は自分の悔い改めを表わし、心を尽くして主の定めを守るという契約を立てた。ヨシヤは民が自分たちの背教から立ち返り、生ける神に仕えるために、なしえることをみなするまで安んじなかった。

これこそ、今日わたしたちの働きではないだろうか。わたしたちの父祖は罪を犯した。そしてわたしたちは彼らの足跡に従ってきた。しかし、神は律法の書を開かれ、背教のイスラエルは主のいましめを聞く。彼らの不法は明らかにされた。そして悔い改めず、自分の道を照らす光に応じて改革しないすべての魂に、神の怒りが下るのである。

イスラエルが天のおきてを踏みにじったがゆえに、ヨシヤが警告と有罪宣告の言葉を聞いたとき、彼は自らを低くした。彼は主の前に泣いた。彼は悔い改めと改革の徹底的な働きをなし、神は彼の努力をお受け入れになった。イスラエルの全会衆はエホバの戒めを守るために厳粛な契約関係に入った。これが今日、わたしたちの仕事である。わたしたちは自分たちの行いの過去の悪を悔い改め、心を尽くして神を求めなければならない。わたしたちは神が仰

せになることは本気だということを信じ、いかなる方法においても、悪と妥協してはならない。神のみ前に自らを大いに低くし、このお方の恩寵を失うよりは何であつても他を失う方がましだと考えるべきである。

キリストは律法の違反の結果と刑罰から、人間を救うためにすべてを後にされた。まぶねからカルバリーまでの道のりは血のしるしがついていた。神の御子は、十字架の死に至るまで、ゆるがない従順の道からそれることがなかった。このお方は人間の罪の苦悩をみな耐えて下さった。……わたしはキリストの名によって、あなたに嘆願する。あなたは自分の名前が命の書から除去されることなく、御父とその御使たちの前で告白してもらえるように、自分の罪を告白し、自分の方法を改革しなさい。イエスは御父の前でご自分の血を嘆願しておられる。だから今、憐れみが立ち去りかね、恩恵期間が延ばされている間に、天の是認を求めなさい。(ビュー・アンド・ヘアル 1911 年 6 月 29 日)

2月13日

神はご自分の正義と愛を表わされる

「愛は隣りに害を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである。」(ローマ 13:10)

わたしたちのはじめの両親の墮落の後、キリストは彼らを罪の刑罰から救うために、ご自分が敵自身の戦場でサタンを征服するために世に行くことを宣言された。天で始まった争闘は、地上で続けられるのであった。

この争闘には多くのことがかかっていた。莫大な利益が危険にさらされていた。宇宙の住民の前に答えられるべき問いがあった。「神の律法は不完全なのだろうか。修正もしくは廃止が必要なのだろうか、あるいは不朽のものであろうか。神の統治に変更が必要なのだろうか、あるいはそれは不変のものであろうか」。

キリストの初臨の前に、神の律法に一致することを拒む罪が広く行き渡っていた。一見サタンの力は大きくなっていった。天に対する彼の戦争はますます決定的なものとなっていた。危機に至っていた。非常な関心を持って、天使たちは神の動きを見守っていた。神はご自分の場所から出て行かれて世の住民たちをその悪のために罰せられるであろうか。このお方は彼らを滅ぼすために火か洪水を送られるであろうか。全天は自分たちの司令官が反逆の世に怒りの杯を注ぐようにお命じになるのを待っていた。このお方の一言、一つの合図で世界は滅びるのであった。墮落していない諸世界は言うであろう、「アーメン。神よ、あなたは正しいお方です。なぜなら、反逆を根絶されたのですから」。

しかし、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」。神はご自分の御子を有罪宣告を下すために送ることもおできになったが、救うために送られた。キリストは贖い主として来られた。この動きが天使たちに及ぼ

した効果は、言葉では描写できない。驚きと崇敬をもって、ただ彼らは次のように叫ぶことができるだけであった、「ここに愛がある!」。

キリストはご自分の憐れみの使命に入られた。そしてまぶねから十字架まで敵に攻撃された。サタンは戦場の一インチごとに闘い、このお方を打ち負かすために自分の最高の力を働かせた。嵐のような誘惑が次々とこのお方に打ちつけた。しかし、それらが容赦なく降りかかれれば降りかかるほど、神の御子はますますしっかりとご自分の御父の手によりすがり、血染めの道を押し進まれた。

キリストが通られた闘いの厳しさは、このお方の成功か失敗かにかかわる利益の莫大な大きさに比例していた。……サタンは自分がこの世界で最高権力として統治し続けるために、キリストを投げ打とうとした。……御父、御子、そしてルシファは互いに対する自分たちの真の関係を明らかにしてきた。神はご自分の正義とご自分の愛の間違えようのない証拠を与えてこられた。(サインズ・オブ・タイムズ 1902 年 8 月 27 日)

2月14日

真理は生活の中で 実践されなければならない

「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行う者は義人である。」(ヨハネ第一 3:7)

キリストが天の雲に乗って力と大いなる栄光を伴い王の王、主の主として現われるのを待ち望んでいる人々は、生活と品性において世にこのお方を表そうと努めるのである。「彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする」。彼らはキリストが罪を憎まれたように、罪と悪を憎む。彼らはキリストがご自分の御父のいましめを守られたように、神のいましめを守る。彼らは真理の教理を嫌々守るだけでは十分ではないことを悟る。そうではなく、キリストに従う人々がこのお方と一つになり、神がご自分の領域において純潔であられるように、人が自分の領域において純潔になるためには、真理が心に適用され、生活において実践されなければならないことを悟る。どの時代にも、神の子だと主張し、はっか、いのんど、クミンなどの薬味の十分の一を納めてながら、信心のない生活を送っている人々がいる。なぜなら、彼らは律法の中でもっと重要な、あわれみ、正義、そして神の愛をなおざりにしているからである。……

神の子らは世俗の人と似た者ではない。なぜなら、心のうちに受け入れられた真理は魂を清め、品性を変化させる手段となり、その受けた者を神と似た思いの者とするからである。人が神と似た思いの者とならないかぎり、彼はなお自分の生来の墮落した状態のままである。もしキリストが心の中におられるなら、このお方は家庭の中に、職場の中に、市場の中に、教会の中に現われるのである。真理の力は思いを高め、高尚にし、心を和らげ征服し、人全体を神との調和に入れることに感じられる。真理によって変えられる者は、世

に光を降り注ぐ。自分のうちにキリストの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする。キリストが現われるという望みは、大きな望みであり、遠大な望みである。それは王をその麗しさのうちに見て、このお方のようにされるという望みである。……

キリストのうちに宿っている人は、神の愛のうちに完成される。そして彼の目的、思想、言葉、行動は、神の律法のいましめのうちに表現された神のご意志に調和している。キリストのうちに宿っている人の心のうちには、神の律法のいかなる規則に対しても戦うものはない。キリストの御霊が心のうちにあるところでは、キリストの品性が現われ、挑発の下でも優しさが、試練の下でも忍耐が表わされる。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行う者は義人である」。義はただ神の偉大な道徳的標準、すなわち十誡によってのみ定義することができる。品性を測る他の規則はない。
(サインズ・オブ・タイムズ 1895 年 6 月 20 日)

2月15日

神の権威が永久に確立された

「するとイエスは彼に言われた、『サタンよ、退け。』「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」と書いてある』。」(マタイ 4:10)

サタンは自分が宇宙の自由のために働いているように見せかけようとした。彼は自分の議論を多岐にわたる欺瞞的で陰湿なものとすることによって、すべての人に神の律法は専横的であると思わせようとした。十字架の上にかかって、サタンからその火のような誘惑に攻撃されている時でさえ、キリストは勝利しておられた。……このお方はその臨終の息で、「すべてが終わった」と叫ばれた。闘いは勝利を得た。……罪のないお方の血が罪ある者のために流された。このお方の与えてくださる命によって、人は永遠の死から買い戻され、死の力を持つ者の運命は封印された。

キリストの死までは、サタンの品性は天使や墮落していない諸世界にはっきり明らかにされていなかった。そのとき、かつて高められた天使であった者の言い逃れと告発が、その真の光のうちに理解された。彼の公言していたしみのない品性は欺瞞的なものであることがわかった。自らを最高位にまで高めるためにふかく仕組まれた彼の陰謀は、完全に見抜かれた。彼の偽りがすべてのものに明らかになった。神の権威は永遠に確立された。真理は偽りに対して勝利した。

この世界の限られたわずかな被造物の思いの中ばかりでなく、宇宙のすべての住民の思いの中で、神の律法の不変性が確立された。キリストに敵するサタンの行動の開始がすべての世界に伝えられた。ついに問題が決定されたとき、すべての墮落していない存在者たちは反逆に対する義憤を表明した。彼らは声を合わせて、神を義にして、憐れみ深く、自己を否定なさり、正義なるお方として称賛した。

全宇宙は、命の君が選ばれた武器―聖書の言葉、すなわち「こう書かれています」―を目撃した。そして世の君によって用いられた武器―偽りと欺瞞―を目撃した。彼らは命の君がまっすぐに真理、正直、高潔の方針の中で処しているのに対し、世の君は自分のずる賢く狡猾な隠し事、陰謀、敵意、復讐の力を行使しているのを見た。彼らは真理の旗印を持っておられるお方が、真理を維持するためにすべて、ご自分の命さえ犠牲にしているのを見る一方、反逆の旗印を持つ者は、真理の神に対する自分の告発を強め続けているのを見た。

天の諸世界と天そのものは、神の長い寛容に驚いていた。……主はサタンを天から追放することによって、ご自分の知恵と正義を表わされた。……すべての墮落していない存在者たちは今や、神の律法を不変のものとみなすことにおいて一致した。……このお方の律法は欠陥がないことが証明された。このお方の統治は永遠に安全である。(サインズ・オブ・タイムズ 1902 年 8 月 27 日)

2月16日

神の律法の根底にある原則

「『こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。』」（マタイ 5:3）

キリストの山上の垂訓の中で、光と真理が与えられ、そして命のすべての条件と、神がわたしたちの手から要求されるすべての義務に適用される原則がしかれた。キリストはご自分の選民が荒野でさまよっていたときに、彼らに自ら宣言された律法を大いなるものとし、尊ぶために来られたのである。……

キリストはご自分のすべての教訓において、ご自分の聴衆の思いと心に、ご自分の義の偉大な標準の根底にある原則を印象づけようとした。このお方は彼らにもし彼らが神のいましめを守るならば、神への愛と人類同胞への愛が日常生活の中に表されるはずだとお教えになった。このお方は彼らの心にご自分が人類に対して感じておられる愛を植えつけようとした。こうしてこのお方は真理、すなわち聖潔と品性の麗しさという豊かな収穫を産出する実の種をまかれた。聖なる感化は時が続く限り及ぶだけでなく、その結果は永遠にわたって感じられるのである。それは行動を聖化し、どこに存在しようと精練する感化力を持っている。

山に座し、ご自分の弟子や大群衆に囲まれて、イエスは「口を開き、彼らに教えて言われた。こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」。これらの人々はつぶやき不平を言う人々ではなく、人生における自分の状況や環境に満足している人々である。彼らはみ摂理が自分たちにわりあてた地位よりも自分たちはもっと良い地位にふさわしいと感じることなく、自分たちに与えられたすべての恩寵に感謝の精神を表わす。すべての誇り高い考えと高められた感情は払いのけられる。……

真に聖化されている人々は自分自身の弱さを自覚している。自分たちの必

要を感じ、彼らは光と恵みと力を求めてイエスの許へ行く。このお方には満ちみちた徳が宿っており、このお方だけが彼らの欠乏を満たすことができるのである。自分自身の不完全さを自覚して、彼らはもっとキリストのようになること、またこのお方の聖なる律法の原則に従って生きることを求める。このように絶えず無力さを自覚しているために、神に全的により頼むように導かれ、このお方の御霊が彼らのうちに例証されるのである。天の宝はすべての飢え渇く魂の欠乏を満たすために開かれる。この品性を持つすべての人には、いつか想像ではかすかにしか捕らえることのできない王国の栄光を眺めるという保証がある。……

クリスチャンの標準とは、いつも彼の前にキリストのご品性の純潔と麗しさを保っていることである。日々、彼は新しい麗しさを着て、さらにますます神聖なみかたちを世に反映することができる。(パイプル・エコー 1896 年 2 月 21 日)

2月17日

さばきの標準

「だから、自由の律法によってさばかるべき者らしく語り、かつ行いなさい。」
(ヤコブ 2:12)

黙示録 14 章の第一天使は、人々に「神をおそれ、神に栄光を帰せよ」そして天地の創造主としてこのお方に礼拝するようにと呼び求めている。こうするためには、彼らはこのお方の律法に従わなければならない。……このお方のいましめへの従順がなければ、どの礼拝も神を喜ばせることはできない。なぜなら、「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ること」だからである。(ヨハネ第一 5:3)。

多くの宗教教師たちはキリストがその死によって、わたしたちを律法から解放したと言う。しかし、すべての人がこの見解をとっているのではない。……神の律法はその性質からいって不変である。それはその創始者の意志と品性の啓示である。神は愛であり、このお方の律法は愛である。その二つの偉大な原則は神と人への愛である。「愛は律法を完成する」。神のご品性は義と真理であり、それがこのお方の律法の性質である。詩篇記者は、「あなたのおきてはまことです」、「あなたのすべての戒めは正しい」と述べている。そして使徒パウロは「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」と宣言している。そのような律法、すなわち神の思いと意志の表現は、その創始者と同様に永続的なものでなければならない。

そしてこの律法は、さばきにおいて人の生活と品性を試す標準である。わたしたちにこのお方のいましめに従う義務を指し示した後、ソロモンは次のように付け加えた。神は「すべてのわざ……を……さばかれる」。使徒ヤコブは自分の兄弟たちに、「自由の律法によってさばかるべき者らしく語り、かつ行いなさい」と訓告した。

イエスはさばきにおいてご自分の民の助け主（弁護者）として出席し、彼らのために神のみ前に嘆願して下さる。「もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」（ヨハネ第一 2:1）。「キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらなくて、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである」。「彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」（ヘブル 9:24、7:25）。

さばきにおいて、真に罪を悔い改め、信仰によってキリストの血を自分の贖罪の犠牲だと主張してきた人々はみな天の書にある自分たちの名のところに許し書き込まれる。彼らがキリストの義にあずかる者となり、神の律法に調和しているのを見出されるとき、彼らの罪は除去され、彼ら自身が永遠の命にふさわしいものとみなされるようになる。……イエスは、「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。また、わたしの父と御使たちの前で、その名を言いあらわそう」と言われた。（ザン・ワッチマン 1905 年 10 月 10 日）

2月18日

わたしたちはいかにして 神の律法を守ることができるか

「そのみわぎは栄光と威厳とに満ち、その義はとこしえに、うせることがない。」

(詩篇 111:3)

神の栄光の一すじ、キリストの純潔の一ひらめきが魂をつきぬけると、汚れのしみを一つ一つ痛々しいまでにはつきりさせ、人間の品性の醜さと欠点をあらわにする。邪悪な動機、神聖を汚す願望、心の無信仰、唇の汚れを明らかにし、生活をあらわにする神の律法の聖なる標準の前に連れてこられた者が、どうして聖潔を誇ることができようか。神の律法を無効にする彼の不忠の行為が彼の目にさらされ、彼の霊は神の御霊の探る感化力の下に打たれ、苦しめられる。彼はイエス・キリストの偉大さ、大権、純潔でしみのないご品性を見て、自らをはなはだ厭う。

キリストの御霊がその驚くべき覚醒の力をもって心をかきたてるとき、魂のうちに不足の自覚が生じ、自分がそれまでに得たことを誇って自慢するより、むしろ思いの悔悟と自己のへりくだりへ導かれる。ダニエルが自分のところに遣わされた天の使命者を囲む栄光と威光を見たとき、彼はそのすばらしい光景を描写して叫んだ。「それでわたしひとり残って、この大いなる幻を見たので、力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」。

魂がこのように触れられるとき、それ自体を自己義や見せかけの聖潔の衣でくるんだりはしない。そうではなく、その利己心を憎み、その自己愛を嫌悪し、キリストの義を通して、神の律法とキリストのご品性に調和した心の純潔を求めるのである。彼はそのとき、キリストのご品性、すなわち栄光の望みを反射する。彼にとってイエスが自分を贖うためにそれほど大きな犠牲を払われたことが最大の神秘なのである。

彼は謙遜な表情と震える唇で叫ぶ。「このお方はわたしを愛して下さい。このお方はわたしのためにご自身を与えてくださった。このお方はご自分の貧しさを通してわたしが富むものとなるために貧しくなられました。悲しみの人はわたしをはねつけることなく、わたしの心がきよくなるように、ご自分の無尽蔵の贖いの愛を注いでくださった。そしてこのお方は忠誠とご自分のすべてのいましめへの従順にわたしを連れ戻して下さい。このお方のへりくだり、このお方の屈辱、このお方の十字架は、救いの計画の驚くべき現われにおける最高の奇跡である。……このお方がこれらすべてのことをなして下さいしたのは、わたしが犯した律法をわたしが守れるようにするためご自身の義をわたしに与えることを可能とするためであった。このゆえに、わたしはこのお方を崇敬する。わたしはこのお方のことをすべての罪人に宣べ伝える。」(ビュー・アンド・ヘラルド 1888 年 10 月 16 日)

2月19日

神の律法の意味

「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ（改心させ）」（詩篇 19:7）

肉の思いは神に対して敵し、このお方のみ旨に反逆する。……

わたしは人に神のみ旨の知識がないのを示された。……しかし神の御霊が人に律法の完全な意味を明らかにされると、なんという変化がその心のうちに起こることであろう！ベルシャザルのように、彼は知的に全能者の手書きを読み、確信がその魂を捕らえる。神のみ言葉の雷により、彼は昏睡状態からびっくりして目覚め、イエスのみ名のうちに憐れみを求める。そしてその謙遜な嘆願に神はいつも喜んで耳を傾けてくださるのである。このお方は悔い改めた者を決して慰めずに帰されることはない。……

もし神の民が自分たちを扱われる神の方法を認め、このお方の教えを受け入れるならば、自分たちの足のためにまっすぐな道と、闇と失望を通じて彼らを導く光を見出すのである。ダビデは神が自分を扱ってくださる方法から知恵を学び、いと高きお方のこらしめの下でへりくだりのうちに頭を垂れた。預言者ナタンによるダビデの真の状態の忠実な描写により、ダビデは自分自身の罪を知り、それは彼がそれらを取り除く助けとなった。彼は柔和に勧告を受け入れ、自らを神のみ前にへりくだらせた。彼は「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ」と叫んでいる。

悔い改めた罪人たちは自分たちの不法を思い起こされ、自分たちの危険を警告されたからといって絶望する理由はない。彼らのためのこれらの努力そのものが、神が彼らをどれほど愛し、救いたいと望んでおられるかを示している。彼らは永遠の命を受け継ぐために、ただこのお方の勧告に従い、このお方のみ旨を行なえばよいのである。神は過ちに陥っているご自分の民の前にその罪をおき、彼らが神聖な真理の光の下で、それらをことごとくその極悪さのうちに

見ることができるようなさる。そのとき、彼らの義務はそれらを永遠に捨てることである。

神は父祖たちの時代やダビデの時代、預言者や使徒たちの時代に罪から救うのに力強かったのと同様、今日も力強い。聖なる歴史の中で記録された、神がご自分の民をその悪から救出された数多くの事例によって、この時代のクリスチャンたちは神の教えを受けるために真剣に、またさばきの厳密な調査に耐える品性を完成させるために熱心になるべきである。……

靈感の言葉は過ちに陥っている魂を慰め、元気づける。父祖たちや使徒たちは人間の弱さの下にあったが、なお信仰を通して彼らは良い評判を得、主の力のうちに自分たちの戦いを戦い、栄光の勝利を得た。このようにわたしたちは贖罪の犠牲の徳に信頼し、イエスのみ名のうちに勝利者となることができる。人類はアダムの時から現在に至るまで全世界の人類であり、各時代を経て神の愛は比類がない。(教会への証 4 巻 13 ～ 15)

2月20日

キリストのご品性を研究し、 このお方のようになる

「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。」(マタイ 6:24)

二心のクリスチャンは神の栄光を曇らせ、敬神を誤り伝え、何が生きた信心を構成しているかについて誤った考えを人々に受けさせる原因となる。他の人々は、もしこれらの誠実でない公言者たちがそうできるなら、自分たちもクリスチャンになりながら、自分自身の好みに相談し、肉のために備えをなすことができると考える。多くの自称クリスチャンの旗印に書かれているモットーは、「あなたは神に仕え、また自己を喜ばせることができる—あなたは神と富に兼ね仕えることができる」である。彼らは賢いおとめだと公言するが、自分たちのともし火の器の中に恵みの油を持っていないので、神の栄光にも人々の救いのためにも光を発することができない。彼らは世の贖い主が不可能だと仰せになったことをしようとしているのである。このお方は、「あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」と宣言された。

クリスチャンだと公言していながら、キリストのみ足の跡に従っていない人々は、このお方のみ言葉を効果のないものとし、救いの計画を不明瞭にしている。その精神と態度によって、彼らは事実上、次のように言っているのである。「イエスよ、あなたの時代にあなたは、わたしたちが自分たちの時代にわかっているように、わかっておられなかったのです。人は神と富に兼ね仕えることができます」。これらの宗教を公言する人々は神の律法を守っていると主張するが、守っていないのである。ああ、真の人間性の標準が人の手に任ざれていたら、どうなったことであろう！神はご自身の標準—神の戒めとイエスの信仰—を掲げてこられた。そして神への完全な明け渡しに続く経験は、聖霊におけ

る義、平安、喜びである。(レビュー・アンド・ヘルト 1890 年 8 月 19 日)

あなたは良い者に成長するまで待つ必要はない。あなたは自分のなんらかの努力が、自分の祈りを受け入れられるものとし、自分に救いをもたらすと考える必要はない。男女は各々、人にではなく、神に祈ろうではないか。各々、へりくだりのうちにキリストの下へ来よう。

あなたは神があなたの述べる一つ一つの言葉をお聞きになることを信じて、自分自身で神に祈るべきである。あなたの心をこのお方の調査の前にあらわにし、自分の罪を告白し、あなたを許してくださるよう求め、贖罪の功績を嘆願し、それから信仰によって贖いの偉大な計画を熟考しなさい。そうすれば慰め主がすべてのことをあなたに思い起こさせてくださる。

あなたがキリストのご品性を研究すればするほど、このお方はますますあなたに魅力的に見えてくる。このお方はあなたに近い者となり、あなたと緊密な交わりのうちにおられるようになる。あなたの愛情はこのお方を慕い求める。思いはそれが最も関わる対象によって形づくられるのであるから、イエスについて考え、このお方について語るなら、あなたは霊と品性においてこのお方ようになる。あなたは偉大で純潔で霊的なこのお方のみかたちを反映するようになる。あなたはキリストの思いを持ち、このお方はあなたを世にご自分の霊的な代表者として遣わされるのである。(同上 1890 年 8 月 26 日)

2月21日

真の愛は悪と妥協しない

「すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法である。あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない。」(ヨハネ第一 3:4, 5)

歳月が流れて、信者の数が増えるにしたがい、ヨハネはますます誠実に、熱心に兄弟たちのために働いた。時代は教会にとって非常に危険なときであった。サタンの欺瞞は至るところにあった。サタンの使者たちは中傷や偽りによって、キリストの教えに反対しようとした。その結果、教会は不和と異端におびやかされていた。キリストに信仰を告白した者たちの中には、神の愛が神の律法に対する服従から彼らを解放したと主張する者もいた。一方、多くの者たちは、ユダヤの習慣や儀式を守る必要がある、また、救いには、キリストの血を信じることなく、ただ律法を遵守するだけで十分であると教えた。

ある者たちは、キリストを立派な人だとしていたが、キリストの神性を否定した。神のみわざに忠実なふりをしていた者たちは欺瞞者であって、実際にはキリストとその福音を否定した。罪を犯す生活をしながら彼らは教会に異端を持ち込んだ。こうして多くの者たちが懷疑と欺瞞の迷路に連れ込まれた。

ヨハネはこうした悪意ある誤りが教会に忍びこんで来るのを見て、悲しみでいっぱいになった。彼は教会が危険にさらされていることを悟って、すぐさまこの急場に果敢な処置をとった。ヨハネの手紙は愛の精神を漂わせている。それは、まるで彼が愛の中にペンをどっぷり浸して書いたように思える。しかしヨハネは、神の律法を犯しながら、なお罪のない生活をしていると主張する人々と接触するにあたって、その人たちの恐ろしい欺瞞を、ためらうことなく忠告した。……

われわれは、キリストのうちにとどまっていると主張しながら、神の律法を

犯す生活をしている人々に対して、愛されたヨハネと同じ判断をする権威を認められている。初代の教会の繁栄をおびやかしたような悪が、この終わりの時代にも存在する。ゆえに、こうした点についての使徒ヨハネの教えを、慎重に心にとめていなければならない。「愛がなければならない」は、どこでも聞かれる叫びである。特に、きよめられたと言っている人たちから聞かれる。しかし、真の愛は純粹であって、告白されていない罪をおおい隠すことはできない。キリストが身代わりとなられた魂を愛しているかぎり、悪と妥協しないようにしなければならない。われわれは反逆者と手を結んで、これを愛と呼ぶべきではない。神は現代の世界にいる神の民たちに、ヨハネが魂を破壊する過ちに反対して立ったように、正義のために断固として立つよう要求されている。……救い主のご生涯と死に関する彼のあかしは、明瞭で力のこもったものであった。救い主に対する愛が豊かにあふれる心から彼は話したので、だれも彼の言葉をとめることはできなかった。(患難から栄光へ下巻 256 ～ 259)

2月22日

律法の靈性

「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。」(マタイ 5:17)

むかし、雷鳴と炎の中で、シナイ山上から律法を宣告なさったのはキリストであった。焼き尽くす火のような神の栄光がその頂をおおい、山は主のご臨在に震動した。イスラエルの群衆は地にひれ伏し、おののきながら律法の聖なる戒めに聞きいった。……

律法が与えられた当時、イスラエルはエジプトの長い生活のために墮落していたので、神の大能と威厳とを印象づけられる必要があった。それでも神は、愛の神として彼らにご自身を現わされたのであった。……

シナイで与えられた律法は、愛の原則の言明であり、天の律法の地上への啓示であった。それは仲保者キリストの手で制定され、そのみ力を通して人間の心をこの原則に調和させることのおできになるキリストによって語られたのであった。神はイスラエルに「あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならない」とのべて、律法の目的をあらわされた(出エジプト記 22:31)。

しかし、イスラエルは律法の靈的性格を理解せず、彼らのいわゆる服従とは、心が愛の主権に従うことではなく、単に形式と礼典の遵守にすぎないことがあまりに多かった。イエスをご自分の品性とお働きによって、神のきよく情け深い、父としての性質を人々に現わし、単に儀礼的な服従の無価値なことを示されたときにも、ユダヤ人の指導者たちは、イエスのことばを聞きいれず、また理解もしなかった。彼らは、イエスは律法の要求をあまりに軽視していると考え、神から命じられて彼らが行なっている宮の奉仕の真髄である真理そのものが目前に示されると、かれらはただ外面ばかりを見て、イエスはその奉仕を破壊しようとしているのだと非難した。

キリストの語られるみことばは、静かではあったが、群衆の心を動かす熱と力がこもっていた。……彼らは「その教えにひどく驚いた。それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである」(マタイ 7:28, 29)。パリサイ人は、自分たちの教え方とキリストの教え方との大きな違いに気がついた。彼らは、真理の威厳と純粋さと美しさとか、落ちついた深い影響力を伴って、多くの人々の心をしっかりとつかんでゆくを見た。救い主の天来の愛とやさしさが、人々の心をかれに引きよせた。……

救い主は、モーセを通して与えられた宗教とおきてへの信仰をくつがえすことは一言も言われなかった。なぜなら、このイスラエルの大指導者がその民に伝えた天来の光は、その一筋一筋がキリストから受けたものだったのである。多くの人々、キリストが律法を廃するためにこられたのだと思っているが、イエスはまちがう余地のないことばで神の律法への態度を明らかにしておられる。「わたしが律法や預言者を廃するために来た、と思ってはならない」とイエスは言われた(マタイ 5:17)。(祝福の山 56～59)

2月23日

新しい契約の約束

「『わたしが、それらの日の後、彼らに対して立てようとする契約はこれであると、主が言われる。わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう』と言い、さらに、『もはや、彼らの罪と彼らの不法とを、思い出すことはしない』と述べている。」（ヘブル 10:16, 17）

律法を廃することが自分の意図なのではないと宣言なさったおかたは、人間を創造し、かつ律法をお与えになったおかたである。日光に漂うほこりから天上の諸世界に至るまで、自然界のものはすべておきてのもとにある。そして自然界の秩序と調和は、これらのおきてに従うことにかかっているのである。それと同じく、すべての知的存在の生命を支配する偉大な義の原則があつて、宇宙の安寧は、これらの原則に一致するか否かにかかっている。

地球が創造される以前から、神の律法はあつた。天使もこれらの原則によって治められている。そして、地が天と調和するためには、人もまた天のおきてに従わなければならない。「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」時にキリストは律法をお与えになった（ヨブ記 38:7）。地上におけるキリストの使命は、律法を廃することではなく、その恵みによって人類を再びその律法に従わせることであつた。

山上でイエスのことばに聞きついていた愛された弟子ヨハネは、そのずっと後に聖霊の感動のもとに筆をとり、律法を永遠の義務として述べてこう言っている。「罪とは律法に背くことである、」また「すべて罪を犯す者は、律法に背く者である」（ヨハネ第一 3:4 英語欽定訳）。ヨハネは、ここで言う律法は「あなたがたが初めから受けていた古い戒めである」ことを明らかにしている（ヨハネ第一 2:7）。彼は創造の時すでに存在しており、シナイ山で反復された律法のことを言っているのである。……

イエスは、律法の霊的な性質を示し、その遠大な原則を教え、それが永遠の義務であることを明らかにされるのであった。

この世のどんなに高尚で柔和な人も、キリストの品性のこうごうしい美しさにくらべれば、そのかすかな反映にすぎない。キリストのことを霊に感じてソロモンは「万人にぬきんで……彼はことごとく美しい」と歌った（雅歌 5:10, 16）。ダビデもまた預言の幻のうちにみ姿を見て、「あなたは人の子らにまさって麗し」と歌った（詩篇 45:2）。イエスは、天父の本質の真の姿であり、その栄光の輝きである。地上における愛の生涯の初めから終わりまで、自己を犠牲にされた贖い主は、神の律法の性格の生きた表現であった。キリストの生涯によって、天来の愛とキリストのような原則とが、永遠の公正という法則の基礎であることが明らかにされている。……

生命の偉大なる律法として樂園の人類に知らされた原則は、樂園回復の後にも変わることなく存続する。（祝福の山 60 ～ 63）

2月24日

悪に対するいけがきである 神の律法

「〔このお方のいましめ〕は世々かぎりなく堅く立ち、真実と正直とをもってなされた。」(詩篇 111:8)

一つの戒めでも故意に破る者は、そのどれをも霊とまことをもって守らない。……「律法をことごとく守ったとしても、その一つの点にでも落ち度があれば、全体を犯したことになるからである」(ヤコブ 2:10)。

罪を構成するのは不従順の大きな行為ではなくて、最も小さな点で神の表わされたみこころに一致しないことである。それは、魂と罪との間に依然としてかわり合いがあることを示しているからである。心は二つのものに仕えているのである。これは事実上、神を否定したことであつて、神の政府の律法に対する反逆である。

かりに人が主のご要求を離れて、自分で義務の標準を立てる自由があるとすると、人それぞれに合うさまざまの標準ができることとなり、支配権は主のみ手から奪われてしまうことになる。人間の意志が最高権威とされ、高く聖なる神のみ旨―神の被造物に対する愛の目的―は尊ばれず、軽んじられることであろう。

人々が自分たちの道を選ぶときはいつでも、神に敵対することになる。彼らは天の原則と戦っているのであるから、天のみ国にはいることはできない。彼らは、神のみこころを無視して、自分たちを神と人との敵であるサタン側に置いているのである。人は、神のお語りになった一つのことばでもなく、また、多くのことばでもなく、すべてのことばによって生きるのである。わたしたちは、たとえそれがどんなにささいなことに見えようとも、一つのことばでも無視するなら安全を保つことはできない。この世においても、きたるべき世においても、

人間の安寧と幸福のためにならないような律法の戒めは一つもない。

神の律法に服従することによって、人間はいけがきをめぐらされたように悪から守られる。神が築かれたこの障壁のいか所でもこわす者は、それが持つ保護の力を破壊したのである。なぜなら、敵が侵入して荒らし滅ぼすための通路を開いてしまったからである。

神のみこころの一点をあえて無視することによって、わたしたちの最初の祖先は、この世界にわざわいの水門を開いてしまった。そしてかれらの例にならう者はみな、同様の結果を刈り取る。神の愛がその律法の一つ一つの戒めの基礎である。そして戒めを離れる者は、自分で自分の不幸と破滅をもたらしているのである。……

律法的宗教は、魂を神と調和させるのに不十分である。……唯一のまことの信仰は、「愛によって働」き魂をきよめる信仰である（ガラテヤ 5:6）。それは品性を改変するパン種のようなものである。……イエスはさらに進んで、神の戒めを守るとはどういうことか、すなわちそれはキリストのご品性を自分たちのうちに再現することであることを聴衆にお教えになった。なぜなら、神はキリストにおいて、日々彼らの前に現わされていたからである。（祝福の山 64 ～ 68）

2月25日

すべての魂をたいせつに遇するべき

「あなたは心に兄弟を憎んではならない。……あなたの民の人々に恨みをいだいてはならない。あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。わたしは主である。」(レビ記 19:17, 18)

救い主のことばはその聴衆に対して、彼らが他人を罪びとであると非難しているあいだは、自分たちも悪意と憎しみを抱いているのであるから、同様に罪ある者であることを明らかにした。……彼らはローマの圧政者に最もはげしい憎しみを抱き、他のすべての民族や、また自国民でも彼らの考えに全面的に同調しない人々を憎んだりさげすんだりするのは自由だと思っていた。彼らはこのすべてにおいて、「あなたは殺してはならない」と言明している律法を犯していた。

憎悪と復讐(しゅう)の精神はサタンから出、この精神がサタンに神のみ子を殺害させたのである。だれでも悪意や冷酷な心を抱く者は、これと同じ精神を抱いている……種の中に草木がすでに包まれているように、復讐心の中に悪の行為が包まれている。……神はわたしたちの贖いのためにみ子を賜うことによって、人間一人一人の魂をどんなに高く見ておられるかをお示しになった。神は、他人をさげすんでうわさする自由をだれにも与えておられない。わたしたちは、周囲の人々に欠陥や弱点を見るであろうが、神はすべての魂は自分のものである— すなわち創造によって自分のものであることと、キリストの尊い血をもって買いとられたゆえに二重に自分のものである— と主張なさる。人はすべて神のみかたちにかたどって創造されたのであって、どんなに墮落した者であっても、たいせつにやさしく遇しなければならない。キリストが生命をささげられたところの一人の魂を、さげすんで語ったひとことに対してさえ、

神はその責任を問われるのである。……

だれでも兄弟を背信者として、あるいは神をさげすむ者として非難する人は、その人自身が同じ非難に値するとイエスは言われる。

キリストご自身も、モーセの死体についてサタンと論じ争われたとき、「相手をののしりさばくこと」はあえてなさらなかった(ユダ 9)。告発は悪魔の武器であるから、もしそうなさっていたら、キリストはサタンの領域にご自分を置かれたことになる。サタンは聖書の中で、「われらの兄弟らを訴える者」と呼ばれている(黙示録 12:10)。イエスはサタンの武器はいつさい用いようとはなさなかった。ただ「主がおまえを戒めて下さるように」と仰せになっただけである(ユダ 9)。

これはわたしたちのための模範である。わたしたちはキリストに敵対する者との争いにまき込まれても、報復の精神をいだいて口を開いたり、ののしりさばくように聞こえることばを言ったりしてはならない。神の代弁者として立つ者は、天の君でさえサタンと争ったときに避けてお用いにならなかったようなことばを語ってはならない。審判と宣告のわざは神にゆだねるべきことである。(祝福の山 69 ～ 72)

2月26日

クリスチャンは日光のように透明であるべき

「しかし、わたしはあなたがたに言う。いっさい誓ってはならない。天をさして誓うな。そこは神の御座であるから。また地をさして誓うな。そこは神の足台であるから。またエルサレムをさして誓うな。それは『大王の都』であるから。また、自分の頭をさして誓うな。あなたは髪の毛一すじさえ、白くも黒くもすることができない。」(マタイ 5:34～36)

わたしたちの所有するいっさいのものは、十字架の印が押され、とうてい評価することができない尊い血潮で買われてわたしたちのところにくるのである。なぜなら、それは神の生命だからである。だから、あたかも自分のものであるかのように、あるものをさして、わたしたちが自分の約束を果たすことを誓う権利のあるものは何一つない。……

イエスは、彼らの誓いの習慣は神の戒めを犯すものだと言って、その風習を非難された。しかし救い主は、語ることがすべて真実で、真実以外の何物でもないことを厳粛に神にかけて誓う裁判の際の誓いを禁じられたのではない。イエスご自身も、サンヒドリンの前で裁判を受けられたとき、誓いのもとに証言することを拒まれなかった。大祭司があなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」と言うとき、イエスは「あなたの言うとおりである」とお答えになった(マタイ 26:63, 64)。……

終始一貫して誓ってあかしすることのできる者がいるとすれば、それはクリスチャンである。クリスチャンは、わたしたちが言い開きをしなくてはならない神の御目にはすべての心の思いがあからさまであることを知って、たえず神のみ前にいるかのように生活するのである。そして誓いを立てるように法的に求められた時には、自分の言うことは真実であって、真実以外の何ものでもない

ことの証人となつてくださるように、神に訴えるのは正しいことである。……

クリスチャンのすることはすべて、日光のように透明でなければならない。真実は神からのものである。欺瞞はその無数の形のどの一つをとっても、みなサタンからのものである。……とはいうものの、真実そのものを語るのは容易なことではない。真実を知らなければ真実を語ることはできない。しかし先入感や偏見や不完全な知識や誤った判断などのために、処理しなければならない事からの正しい理解がどんなにさまたげられていることだろう。わたしたちは、真理なるおかたによってたえず心が導かれなにかぎり、真実を語ることはできない。

キリストは使徒パウロを通して、「いつも……やさしい言葉を使いなさい」「悪い言葉をいっさい、あなたがたの口から出してはいけない。必要があれば、人の徳を高めるのに役立つような言葉を語って、聞いている者の益になるようにしなさい」と命じておられる(コロサイ 4:6, エペソ 4:29)。こうした聖句に照らし合わせると、キリストの山上のことばは、冗談やつまらぬ話やみだらな会話を非難していると考えられる。キリストのおことばは、わたしたちのことばが真実なものであるばかりでなく、清いものでもあるべきだと要求しているのである。

キリストに学んだ者は「実を結ばないやみのわざに加わらない」(エペソ 5:11)。彼らは「口には偽りがな」い聖なる者たちとの交わりのために準備をしているので(黙示録 14:5)、その生活と同じようにことばも、単純で率直で真実なのである。(祝福の山 82～85)

2月27日

許しの愛という神の律法

「(あなたの) 敵を愛し(なさい)。(マタイ 5:44)

「悪人に手向かうな」という救い主の教えは復讐心に燃えるユダヤ人には受け取りがたい言葉であった……しかしイエスはここで、一層強い言葉を述べられた。

「あなたの敵を愛し、あなたをのろう者を祝福し、あなたを憎む者に善をなし、悪意をもってあなたを取り扱い、迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである」(マタイ 5:44, 45 英語訳)。

これが律法のものであって、ラビたちはこれを冷酷できびしい不当な要求のように誤って解釈していたのであった。彼らは、自分たちがほかの者よりすぐれていて、イスラエル人であるために特別な神の恵みを受ける資格があると考えていた。だが彼らが軽べつする取税人や罪びとよりもいくぶんでも高い動機に動かされているならば当然、寛大な愛の精神をあらわすはずであるとイエスは指摘された。

イエスは宇宙の支配者である神を、「われらの父」という新しい名前で聴衆にさし示された。イエスは、神がどのようにやさしく人々に愛情を注いでおられるかを彼らが理解することをお望みになった。……「父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる」ことを、イエスはお教えになっている(詩篇 103:13)。このような神の観念は聖書の宗教以外は何の宗教も世に与えたことがなかった。異教は、神を愛の対象としてではなく恐れの対象として見るように教える。つまり子供らに愛の賜物を惜しみなくお与えになる父としてではなく、犠牲をささげることによってなだめられる悪意をもった神であると示すのである。イスラエルの民でさえ神に関する預言者の尊い教えに盲目になっていて、父のような神の愛のこの啓示は、この世にとってはじめ

での主題であり、新しい賜物のように思えたのであった。……

わたしたちのもっている良いものは、日の光も、雨も、食べ物も、いのちの一瞬一瞬も、すべて愛の賜物である。

わたしたちがまだ人を愛する心がなく、品性に美しさがなく、「人に憎まれ、互に憎み合っていた」時に、天の父は、わたしたちにあわれみをかけてくださった。……

神の子供とは神のご性質を受けついでいる者である。わたしたちが神の家族の一員であることを証明するものは、この世の地位でも生まれでも国籍でも、あるいは宗教上の恩典でもなく、それは愛—全人類を包容する愛—である。罪びとでさえ、その心が神の聖霊に対して全く閉ざされているのでなければ、親切には応じてくる。彼らは、憎まれれば憎むが愛されればまた愛することもできるのである。しかし、憎しみに対して愛で報いるのは神の聖霊だけである。感謝の気持ちのない者や悪しき者に親切を尽くし、何も当てにしないで善をなすこと—これが天の王家の紋章であり、いと高き者の子らがその高い身分を明らかにする確かなしるしである。(祝福の山 90 ～ 92)

2月28日

神の愛の律法が わたしたちのうちに完成される

「もしわたしたちが互に愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである。」(ヨハネ第一 4:12)

永遠の生命を受ける条件は、恵みのもとにあってもエデンの時と同様で、完全な義、神との調和、神の律法の原則への完全な一致である。旧約聖書に示されている品性の標準は、新約聖書に示されているのと同じである。この標準はわたしたちの到達できないものではない。神のお与えになる命令やさすずにはみな約束、しかも非常に積極的な約束が含まれていて、それがその命令の基礎となっている。神はわたしたちが神に似た者となることができるように備えをしてくださっている。そして神は、人が曲がった意志をさしはさんで神の恵みをむなしくしない限り、これをなしとげてくださる。

神は言葉に表現できない愛をもってわたしたちを愛してくださっている。わたしたちが人知を越えたこの愛の長さ、広さ、深さ、高さをいくぶんでも理解するときに、わたしたちの愛は神に向かって目ざめる。人を引きつけるキリストの美しさが表わされることによって、また、わたしたちがまだ罪びとであった時にわたしたちにあらわされたその愛を知ることによって、かたくなな心は溶かされ、和らげられ、罪びとは変えられて天の子となる。神は強制手段はお用いにならない。愛こそ、人の心から罪を追放するために神がお用いになる力である。愛によって神は高慢を謙そんに、敵意と不信を愛と信仰に変えられる。.....

神はご自分が完全であると同様にわたしたちも完全になるようにと仰せられる。神が宇宙にとって光と祝福の中心であられるように、わたしたちは、わたしたちの小さな範囲でそうならなければならない。わたしたちは神の愛の光が

わたしたちを照らし、その輝きを反映するのでなければ、自分では何も持っていない。神が神の領域で完全であられるように、わたしたちは自分の領域で完全な者となることができる。

イエスは、あなたがたの父が完全であられるようにあなたがたも完全な者となりなさいと仰せになった。もし神の子供であれば、あなたがたは神の性質をうけついでおり、従って神に似た者とならざるを得ない。子供はみな、父親の生命によって生きる。あなたがたは、神の子供であって、その聖霊によって生まれたのであれば、神の生命によって生きる。キリストには、「満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿って」いる(コロサイ 2:9)。そしてイエスの生命は「わたしたちの死ぬべき肉体に」現わされる(コリント第二 4:11)。あなたの中にあるこの生命が、イエスに生み出したのと同じ品性を生み出し、イエスに現わしたのと同じわざを現わす。こうしてあなたは主の律法のすべての戒めに調和するようになる。「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ」るからである(詩篇 19:7)。愛を通して「律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされる」のである(ローマ 8:4)。(祝福の山 93～96)

研究 8

三重のメッセージ



第一天使のメッセージ

Part VII

「神のさばきの時がきた」

「神をおそれ……よ。神のさばきの時がきたからである」(黙示録 14:7)。「神のさばきの時がきた」という告知は、人類の救いのためのキリストの務めの最後の働きを指している。」(各時代の大争闘下巻 154)。ですから、このメッセージの一つの大きな目的は、世をさばきのために備えさせることです。このメッセージの言葉自体が「神のさばきの時がきた」というものであり、それが来る、というのではなく、「きた」と述べています。ですから、このメッセージを受け入れるすべての人にとって、神のさばきは、今現在の現実となったわけです。「厳密な審判の時の備えをするのは、今である」(キリストの実物教訓 318)。

このことは、このメッセージが民を主が天の雲に乗ってこれるときに、このお方に会う準備をさせるためであり、そしてその時に準備ができている人々は皆、今、地に臨むすべての悪から「のがれて、人の子の前に立つことができるように」、それにふさわしいものとならなければならないという事実によってさらに強調されています(ルカ 21:36)。彼らは、これから起ころうとしている事件の前に、それにふさわしいものとされなければなりません。さもなければ、彼らはこのお方の再臨をお迎えするときにふさわしくないのです。「真に罪を悔い改め、キリストの血が自分たちの贖いの犠牲であることを信じたものは、みな、天の書物の彼らの名のところに、罪の許し書き込まれる。彼らは、キリストの義にあずかる者となり、彼らの品性は、神の律法にかなったものとなったので、彼らの罪は、ぬぐい去られ、彼ら自身は、永遠の生命にあずかるにふさわしいものとされるのである」(各時代の大争闘下巻 215, 216)。

しばしば人々は、しぶしぶと「審判は今、天の聖所において進行中である。長年にわたって、この働きは続けられてきた。間もなく―その時がいつかはだれも知らないが―生きている人々の番になる」という言葉を引用します（各時代の¹大争闘下巻 224）。そして彼らは生きている人々の時を推測するために、率直な神のみ言葉を、人間の仮説（たとえば、日曜休業令や獣の刻印など）にすり替えようとするのです。預言の霊は、次のように述べています。「わたしたちは神のみ前に自分たちが正しいことを知りたいのである。もしわたしたちがこのお方のみ前に正しくないとすれば、わたしたちはこのお方に対して正しい関係になるよう熱心に努力したいのである。わたしたちは個人個人が、自分で何かをしなければならぬ。わたしたちは自分たちの永遠の利益を当て推量に賭けるような危険を冒してはならない」（ビュー・アソド・ワールド 1887 年 5 月 10 日）。

神の民はいつ生きている人々のさばきの順番になるかを知ることができるでしょうか。聖書は、「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされぬ」と述べています（アモス 3:7）。神はご自分の聖なるみ言葉を通して、明らかになさってきたでしょうか。しかり、ご自分の預言者たちを通して、このお方はさばきについてのメッセージを与えてくれました。「さばきの時がきた」というメッセージは、明白な回答を与えています。これが生きている人々にとっての現代のメッセージではないでしょうか。そしてもしだれでも、自分は神のみ言葉を信じると公言していながら、み言葉が神のさばきの時がきたと教えるときに、この率直なみ言葉を信じないならば、いったい彼らは主が彼らにもう一度お教えになったとしても、それを信じるでしょうか。「もし彼らがモーセと預言者と共に耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう」（ルカ 16:31）。

三天使のメッセージを信じると公言して生きたことのある人が、たとえそれが一日であつたとしても、自ら審判の場身を置くことなく、また自ら審判のあらゆる厳密なテストを受けずにいることができるでしょうか。「神のさばきの時がきた」というみ言葉を信じると公言している人がそれを全く信じず、「神のさばきの時がきた」という現実を信じているならばしないような行動をいつも取ってばかりいるということがあり得るでしょうか。三重のメッセージを信じるすべての信者に関す

る限り、生きていて、かつ神からのこのようなメッセージを受け入れた個人個人は、自分の告白の力そのものによって、ただひとえに自分の信念の徳によって、生きていながら時々刻々とさばきに入るのです。彼は、さばきが行われているところで生きています。彼は自分の生活をあらゆるさばきの厳密なテストの前に開示します。そして彼にはこうしたことが行われているので、次の問いに答えが与えられるのです。すなわち、わたしたちはさばきがいつ生きた人々の順番になるかがわかるでしょうか。

このメッセージは、今の世にあてはまるものです。それは世に与えられています。長年の間、世に与えられてきました。ですから、神のさばきの時がきたというメッセージはすでに長年の間、現代の真理でありましたし、今もそうです。ですから、このさばきの時のメッセージの時代にいる人々は余すことなく、時々刻々と神のさばきに入るものであり、彼らが生きている限り、絶えずこのさばきのあらゆる厳密なテストの下に身をおいているのだというのが原則です。第三天使のメッセージの真の信者にとって、これは事実です。生きた真理です。もしそうでなければ、彼らはいったいこのメッセージをいかにして世に伝えることでしょうか。自分自身がさばきの時が「きた」ことを全く信じず、ただそれがこれから来るということしか信じていないのに、いったいどんな真理の力を持って、他の人に神のさばきの時が「きた」と宣布することができるでしょうか。世の中で、神のさばきが見つかることを信じていない人が一人でもいるでしょうか。しかし、メッセージは、さばきの時がくるというわけではありません。そうではなく、「神のさばきのとき」、まさにその時が「きた」というのです。

「神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである」(伝道の書 12:14)。そして神がすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事をさばかれるからこそ、すべての人は「神を恐れ、その命令を守れ」と勧告されています(13 節)。

「あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、……大声で言った、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。……ここに、神の戒めを守り、イエスの信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」(黙示録 14:6, 7, 12)。そして、今「神のさばきの時がきた」ので、またこのメッセージ

が伝えられたすべての人は神の律法によってさばかれるので、このメッセージを受け入れた人がみな、自分の全生活を律法の光のうちにおくのは当然なことです。それは、聖なる律法と調和していない隠れた事の一つ一つ探し出し、取り除くためです。なぜなら、その律法は最も隠れた事、心の思いや意図そのものにまで及ぶからです。「昔の人々に『殺すな。殺す者は裁判を受けねばならない』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない。兄弟にむかって愚か者と言う者は、議会に引きわたされるであろう。また、ばか者と言う者は、地獄の火に投げ込まれるであろう。」「『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」「だから、自由の律法によってさばかるべき者らしく語り、かつ行いなさい。」(マタイ 5:21, 22, 27, 28, ヤコブ 2:12)。ですから、このメッセージを真摯に受け入れたすべての人にとって、つねに「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」というのが祈りになります(詩篇 139:23, 24)。このように祈るすべての人、生活を神のみ前に開き、このお方を招き入れて、そこに悪しき道のあるかないかを見ていただきます。このような人はすべて、さばきの危機がいつ訪れても、その準備ができています。

「もしあなたの名が小羊の命の書に登録されているならば、あなたにとって万事はよい。準備を整え、切に自分の欠点を告白し、それらを捨てなさい。それはあなたの間違いや罪が前もって裁判にかけられ、除去されるためである。」(信仰によって私は生きる 210)。

「永遠の福音」、それはさばきの開始を告げる

「この運動がいつ起こるものであるかについては、メッセージ自体が明らかにしている。それは、「永遠の福音」の一部であると宣言されている。そして、審判の開始を告知している。救いのメッセージは、各時代において宣べ伝えられてきた。しかし、このメッセージは、終末時代においてのみ宣布される福音の一部分である。というのは、その時において初めて、さばきの時が来たということ

ができるからである。預言は、審判が始まるまでに相次いで起こる種々の事件を示している」(各時代の犬争闘下巻 50)。

「この預言によると、さばきとそれに付随した警告のメッセージのあとに、天の雲にのって人の子が来られることがのべられている。さばきのメッセージの宣布は、キリストの再臨が近いことを知らせている。そしてこの宣布は永遠の福音と呼ばれている。このようにしてキリスト再臨のことを説教して、その切迫を告げることが福音のメッセージの本質的部分であることが示されている」(キリストの実物教訓 227, 228)。

キリストの務めの最後の働き

「わたしたちの信仰を恥じている場合ではない。わたしたちは世にも、御使たちにも、人々にも見世物となっている。全宇宙は、言い表しがたいほどの関心をもって、キリストとサタンの間の大争闘の最後の働きを見ようとうかがっている。このような時に、すなわち生きている人々のさばきの大きいなる働きが始まろうとしているまさにこの時に、わたしたちは清められていない野心が心を奪うのを許してしまうのであろうか。今、天の神に対して忠実で真実であることを見出されること以外に、わたしたちにとって何か価値のあるものがあるであろうか。わたしたちがまさに永遠の世界の門口にいるこの時に、いったいこの世に何か本当に価値のあるものがあるであろうか。わたしたちの学校にいる生徒たちに、「聖書は何と言っているか」という知識ほど必要とされているどんな教育を授けられるであろうか」(クリスチャン教育 212, 213)。

「キリストの犠牲と祭司職の影であった、型としての制度において、聖所の清めは、年ごとの奉仕において大祭司が行なう最後の務めであった。それは、贖罪の最後の働き、すなわち、イスラエルから罪を取り除くことであった。それは、天の記録に記されている神の民の罪を除く、あるいは消し去るという、天の大祭司の奉仕における最後の働きを予表していた。この務めには、調査の働き、審判の働きが含まれていた。そして、それは、キリストが力と大きな栄光のうちに天の雲に乗って来られる直前に起こる。なぜならば、彼が来られる時には、すべての人の運命は決定しているからである。イエスは、「報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう」と言われる(黙示録 22:12)。黙示録 14:7 の「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という第一天

使のメッセージの宣言は、再臨直前のこの審判の働きを言ったものである。」(各時代の大争闘下巻 46)。

「神のさばきの時がきた」という告知は、人類の救いのためのキリストの務めの最後の働きを指している。……1844年に始まった審判の働きは、生きている者も死んだ者も、すべての者の運命が決定されるまで継続しなければならない。したがって、これは、人類の恩恵期間の終わりまで続くのである。人々に審判に立つ準備をさせるために、メッセージは、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。」「天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」と彼らに命じている。これらのメッセージを受け入れる結果は、「ここに、神の戒めを守り、イエスの信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」という言葉で表わされている。審判に対する備えをするためには、人は神の律法を守らなければならない。その律法が、審判の時の品性の規準となるのである。使徒パウロは、次のように言明している。「律法のもとで罪を犯した者は、律法によってさばかれる。……神がキリスト・イエスによって人々の隠れた事からをさばかれるその日に、」また、彼は「律法を行う者が、義とされる」と言っている(ローマ 2:12～16)。神の律法を守るためには、信仰が不可欠である。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。」「すべて信仰によらないことは、罪である」(ヘブル 11:6、ローマ 14:23)」(各時代の大争闘下巻 154)。

さばきの時

「神のさばきの時がきたからである」という第一天使のメッセージとは、……至聖所におけるキリストの務め、すなわち調査審判をさす」(各時代の大争闘下巻 139)。

「さばきのために定められていた時、すなわち 2300 の夕と朝の終わる 1844 年に、調査の働きと罪の除去が始まった」(信仰によって私は生きる 211)。

「審判の明確な時を伝えることは、神の命令であった」(各時代の大争闘下巻 181)。

再臨前のさばき

「この預言によると、さばきとそれに付随した警告のメッセージのあとに、天の雲にのって人の子が来られることがのべられている。さばきのメッセージの宣布

は、キリストの再臨が近いことを知らせている」(キリストの実物教訓 207)。

「こうして、預言の言葉の光に従った者たちは、キリストは、2300 年が 1844 年に終了した時に、この地上に来られるのではなくて、再臨に備えて贖いの最後の働きをするために、天の聖所の至聖所に入られたのだということを知った」(各時代の大争闘下巻 137)。

「調査審判の働きが終わるとき、すべての人の運命は、生か死かに決定されてしまっている。恩恵期間は、主が天の雲に乗って来られる少し前に終了する。キリストは、その時を予見して、黙示録の中で次のように宣言しておられる。「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うまにさせよ。見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう」(黙示録 22:11, 12)」(各時代の大争闘下巻 225)。

「最後の報酬が与えられる前に、だれが義人の嗣業にあずかるにふさわしいかが決定されなければならない。この決定はキリストが天の雲に乗って再臨なさる以前に行なわれなければならない。キリストがこられるときには、報いを携えてきて、「それぞれのしわざに応じて報い」られるからである(黙示録 22:12)。とすると、主の来臨の前にすべての人のわざがどんなものであるかがさばかれ、キリストの弟子の一人一人はその行為にしたがって報いが与えられるのである」(キリストの実物教訓 290)。

神の民と称する人々のためだけの裁き

「最終的な贖罪と調査審判の大いなる日に、審査されるのは、神の民と称する人々だけである。悪人の審判は、これとは全く別の働きで、もっとあとで行なわれる。「さばきが神の家から始められる時がきた。それが、わたしたちからまず始められるとしたら、神の福音に従わない人々の行く末は、どんなであろうか」(ペテロ第一 4:17)」(各時代の大争闘下巻 211, 212)。

「あなたがたは、月日が去り行くときに経験を得ながら、各々自分の恩恵期間を日々生きている。しかし、あなたは二度と同じことをやり直すことはできない。そうであれば、すべての貴重な時を、審判を行う者が席につき、数々の書物が開かれるときに、あなたがそうであればよかったのにと望むような方法で用いよう。わたしたちの主は、わたしたちが持っていた機会に応じて、わたしたちを裁

かれるのである」(天国で190)。

彼らの衣はしみなきものでなければならない

「多くの人々は悩みのときに、聖所に大祭司がおられない状態で、主の御前に生きるためには、どのようになっていなければならないかを悟っていない。生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのみかたちを完全に反映していなければならない。

彼らの衣はしみのないものでなければならない。彼らの品性は、注がれた血によって罪から清められなければならない。神の恵みと自分自身の勤勉な努力とによって、彼らは悪との戦いにおいて、勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行なわれなければならない」(信仰によって私は生きる 337)。

それは今である

「人の一生は、むだにすごすには、あまりにも短い。永遠のために備えをすべき恵みの日は、ほんのわずかしかない。浪費したり、自己の快樂のために用いたり、罪にふけったりする時間はない。将来の永遠の命のために品性を形成するのは、今である。厳密な審判の時の備えをするのは、今である」(キリストの実物教訓 318)。

「これは、なんと厳粛な思想であろう。毎日毎日が永遠の中に過ぎ去り、その日のことが天の書に記録される。一度口に出した言葉、一度行なった行為は、二度と取り返すことができない。天使は、善悪ともに記録しているのである。この世のどんなに偉大な征服者でも、ただ一日の記録さえ取り消すことはできない。われわれの行動、言葉、そして極秘の動機でさえも、みな、われわれの運命を禍福いずれかに決定する重要な役割を持っている。たとえわれわれが忘れていても、それらは、義とするかそれとも罪に定めるかの、証言を立てるのである。

芸術家のよく磨かれた金属板に、人間の顔かたちが正確に反映されるように、人の品性も天の書物に、そのまま描写されている。にもかかわらず人々は、天の存在者たちに見られねばならないその記録について、憂慮することのなんと少ないことであろう。もし、見える世界と見えない世界とをへだてている幕が取り除

かれて、人々が、審判において再び直面しなければならないすべての言行を、天使たちが記録しているのを見ることができるならば、日ごとに語られるどれだけ多くの言葉が、語られずにすみ、どれだけ多くの行為が、なされずにすむことであろう。……

人々の隠れた利己心が、天の書の中であらわにされている。同胞に対して義務を怠ったことが記録され、救い主の要求を忘れたことが記録されている。キリストに属する時間、思想、能力を、なんとたびたびサタンに与えたかを、彼らはそこに見るのである。天使が天にたずさえて行く記録は、実に悲しいものである。キリストの弟子であると称する英知ある人間が、世的財産の蓄積や、地上の快樂の追求に没頭している。金銭、時間、能力は、虚飾と放縱の犠牲になっている。しかし、祈りや聖書研究にあてられる時間、魂のへりくだりと罪の告白にあてられる時間は、ほとんどないのである」(各時代の斗争闘下巻 219～221)。

「偉大なさばきが行われている。そしてそれはしばらくの間、行われてきた。今や主は宮とそこで礼拝する者たちを測れと仰せになる。あなたが商売で街を歩くときにも、神があなたを測っておられることを覚えなさい。あなたが家事に携わっているときも、あなたが会話をしているときも、神はあなたを測っておられる。あなたの言葉と行為が、あたかも芸術家のよく磨かれた金属板に、人間の顔かたちが正確に反映されるように、天の書物に銀板〔写真〕に写し取られていることを覚えなさい。……

だれが最後の日に立ち得るかを調べるために、宮とその礼拝者たちを測る働きが続けられている。堅く立つ人々に「わたしたちの主であり救い主であられるイエス・キリストの王国は広く開かれるのである。わたしたちが自分の働きを為すとき、あなたがそれをどのような精神で行っているかを見ているお方がおられることを覚えなさい。わたしたちは救い主をわたしたちの日常生活の中に、またわたしたちの世俗の働きや家庭の義務の中に迎え入れないのであろうか。そのとき、わたしたちは神の御名によって、必要でないすべてのもの、あらゆる噂話や意味のない訪問を後にして、そして自らを生ける神の僕として捧げたいと望むのである」(SDA パイブル・コメント [E.G. ホワイト・コメント] 7 巻 972)。

「もし今日あなたが神と正しい関係にあるなら、もしキリストが今日来られたとしても、あなたは準備ができています」(信仰によって私は生きる 249)。

(78 ページの続き)

うふく) な思いで、わたしの心を感動(かんどう) させました。わたしはあまりにうれしくて、何も言(い) えませんでした。」(初代文集 163, 164)

ひとつ気づきましたか？

このうつくしいお話の中で、わかいエレンは自分のもっていたすべての小さなもの一彼女が「大切にしていたかざりもの」と言っていたもの一をおかなければなりませんでした。これは戸をはいる前(まえ) は必要(ひつよう) なものでした。

人生(じんせい) においてのちに、かの女は天へむかうせまい道についてもうひとつのゆめを見ました。ちゅうじつな民は、道がせまくなるにつれ、ますます多(おお) くのをあきらめなければなりませんでした。後ろにおいてこなければならなかったものは、かならずしもわるいものではありませんでした。しかし、彼らはついに天(てん) へわたる前にそれらをすてなければなりませんでした。それによって、人々は神さまと神さまを信じる信仰(しんこう) だけが、必要(ひつよう) なすべてのもののみなもとであることをさとりしました。(ライフ・スケッチ 190 ~ 193)

親愛なる子供のみなさん、世の中のほとんどの人は、悪い方向へむかう大通りをすすんでいます。人々は天にもっていくことのできない荷物(にもつ) をたくさんもっています。しかし、そればかりではありません。彼らのもっている多くのものは、天国へいく用意(ようい) のできた人になることさえさまたげています！わたしたちは神さまの道にいつづけるために、多くのものをすてなければなりません。道はだんだんせまくなります。しかし、何かをあきらめなければならないからといって悲しくなってはいけません。いつも、神さまはみなさんのために、もっとよいものをたくわえておられることをおぼえていきましょう！「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(コリント第一 2:9)。「命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない」(マタイ 7:14)。

おかずのかぼちゃパイ

〔材料〕

フィリング

かぼちゃ	中 1 個
たまねぎ	中 1 個
粉末	小さじ 1/2
塩	小さじ 1/2

パイ生地

薄力粉	1 カップ
全粒粉	1 カップ
オリーブオイル	1/3 カップ
粗糖	大さじ 2
塩	少々
豆乳	大さじ 3

〔作り方〕

1. まずフィリングを作ります。かぼちゃを適当な大きさに切って煮ます（きれいなところは皮も残して OK）。
2. 煮えたら、熱いうちにつぶします。
3. 玉ねぎをみじん切りにしてフライパンで炒め、ふたをして中火で蒸し煮にします。しんなりしたら、ふたをとり、透き通るまでよく炒めます。
4. かぼちゃとたまねぎと残りの材料の調味料をよく混ぜます。
5. 次にパイ生地を作ります。豆乳以外のパイ生地の材料をすべてボールに入れてよく混ぜ、オリーブオイルが全体に行きわたるようにします。
6. 豆乳を入れて、よく混ぜ、全体をまとめます。
7. それを二個に分けて、直径 18cm のパイ皿に合うよう、のばします。
8. パイ皿に一枚を敷き、フォークで穴を開けて、オーブンを 200 度にセットし、10 分タイマーを回します（余熱なし）。色が少し変わってきたら、取り出します。
9. フィリングをのせて、さらにもう一枚のパイ生地をのせて、またフォークで穴を開け、きれいな焼き色がついたら、できあがり！

冷めてもおいしいおかずパイです。

豆乳の代わりにココナツミルクを使うと風味が増します。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)



【公開放送】 <http://www.4angels.jp>

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



ささいなものに変わる

ある晩（ばん）若いときに、エレン・ハーモン（後にホワイト）はゆめを見ました。ゆめの中で、かの女はどれほどイエスさまにお会（あ）いしたかったかを話しています。かの女は次のように記（しる）しています。

「すると、ちょうどそのとき、戸が開いて、すがたのうつくしい人が入ってきました。彼は、わたしをあわれみ、『あなたは、イエスに会いたいのですか。彼はここにおられる。もし会いたいならば彼に会うことができます。持ち物をみな持って、わたしについて来なさい』と言いました。

わたしは、言い表しようのない喜びをもって、これを聞きました。そして、わたしのわずかのもちもの、大切にしていたかざりものをみな集めて、案内者（あんないしゃ）について行きました。彼はわたしを、急（きゅう）で一見もろそうな階段（かいだん）につれて行きました。わたしが階段をのぼりはじめると、彼はわたしが目まいをおこしたおれないように、いつも上を見ているようにと注意（ちゅうい）しました。この急な階段をのぼっていた他の多くの人々は、上まで行かないうちに落ちてしまいました。



わたしたちは、ついに、階段をのぼりつめて、戸（と）の前（まえ）に立ちました。ここで、案内者は、わたしがもってきた物をぜんぶ、そこに残しておくように、わたしに命じました。わたしは喜んでそれらをおきました。そこで彼は、戸を開（ひら）き、わたしにその中にはいるように命じました。わたしは一瞬（いっしゅん）のうちに、イエスの前に立っていました。……

彼のやさしい声（こえ）のひびきは、これまでに経験（けいけん）したことのない幸福（こ